

ミャンマー連邦共和国
社会福祉行政官育成プロジェクトフェーズ2
終了時評価調査報告書

平成 26 年 4 月
(2014年)

独立行政法人国際協力機構
人間開発部

人間
JR
14-126

ミャンマー連邦共和国
社会福祉行政官育成プロジェクトフェーズ2
終了時評価調査報告書

平成 26 年 4 月
(2014年)

独立行政法人国際協力機構
人間開発部

目 次

目 次

プロジェクトの位置図

写 真

略語表

評価調査結果要約表（和文・英文）

第1章 終了時評価調査の概要	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的	1
1-2 調査団構成と日程	2
1-3 主要面談者	3
1-4 プロジェクトの概要	3
第2章 評価の方法	5
2-1 終了時評価調査の方法	5
2-2 主な調査項目	5
2-3 データ収集方法	6
第3章 プロジェクトの実績と現状	7
3-1 投入実績	7
3-2 成果の達成度	9
3-3 プロジェクト目標	13
3-4 上位目標	15
3-5 プロジェクト実施の促進要因・阻害要因	15
第4章 終了時評価の結果	17
4-1 妥当性	17
4-2 有効性	17
4-3 効率性	18
4-4 インパクト	19
4-5 持続性	20
第5章 提言と教訓	22
5-1 提言	22
5-2 教訓	23
第6章 団長所感	24

付属資料

1. 面談者リスト	29
2. PDM改訂の内容	31
3. 協議議事録 (Minutes of Meeting : M/M)	32

プロジェクトの位置図



写 真



M/M 署名の様子



M/M 署名後の交換



第5回 JCC において手話通訳を行う手話指導者



プロジェクトサイトにおける手話支援者研修の様子



教育省との協議の様子。DSW も同席し、調査団、専門家とともに、今後の学校現場における OJT についての協議を実施



第5回 JCC 後、手話指導者とともに記念撮影

略 語 表

略語	正式名称	日本語
ASEAN	Association of Southeast Asian Nations	アセアン（東南アジア諸国連合）
C/P	Counterpart	カウンターパート
DSW	Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement	社会福祉復興救済省社会福祉局
JCC	Joint Coordination Committee	合同調整委員会
JICA	Japan International Cooperation Agency	国際協力機構
M/M	Minutes of Meeting	協議議事録
ODA	Official Development Assistance	政府開発援助
OJT	On-the-Job Training	実地訓練
PDM	Project Design Matrix	プロジェクト・デザイン・マトリックス
PO	Plan of Operation	活動計画表
R/D	Record of Discussions	討議議記録

評価調査結果要約表

1. 案件の概要		
国名：ミャンマー連邦共和国	案件名：社会福祉行政官育成プロジェクトフェーズ2	
分野：社会保障	援助形態：技術協力プロジェクト	
所轄部署：人間開発部高等教育・社会保障グループ社会保障課	協力金額：1.0 億円	
協力期間	2011年8月4日～	先方関係機関：社会福祉救済復興省社会福祉局（DSW）
	2014年8月3日	日本側協力機関：NHK、川越市役所、厚生労働省、国立障害者リハビリテーションセンター、全日本ろうあ連盟、東京手話通訳等派遣センター、日本貿易振興機構アジア経済研究所、ふれあいの里どんぐり、明晴学園、横浜ラポール
		他の関連協力：なし
1-1 協力の背景と概要		
<p>ミャンマー連邦共和国（以下、「ミャンマー」と記す）社会福祉救済復興省社会福祉局（Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement : DSW）は、幼児、児童、青少年、女性、高齢者、障害者、薬物中毒者に対する各種公共福祉サービスを提供しているが、同省の各施設は専門の福祉サービスを提供する能力が不足しており、福祉を必要とする各グループに対し、十分に対応ができていない。特に障害者への公的サービスの提供は大きく立ち遅れており、この分野に携わる行政官の人材育成が強く求められていた。</p> <p>本プロジェクトのフェーズ1となる「社会福祉行政官育成プロジェクト」（2007年12月～2010年12月）では、ミャンマー手話の普及、啓発の分野で大きな成果を上げた。しかしながら、聴者とろう者のコミュニケーションを支援する人材はほとんど育成されておらず、ろう者の社会参加を妨げる一因となっていた。このためDSWから、ろう者の更なる社会参加の促進のための手話通訳者の育成を目的としたフェーズ2の要望が提出された。2010年12月の詳細計画策定調査を経て、将来的な手話支援者¹の育成をめざし、手話支援者に手話の指導を行う人材（以下、手話指導者）の育成を目的として、2011年8月から3年間の計画で「社会福祉行政官育成プロジェクトフェーズ2」（以下、「本プロジェクト」と記す）が開始された。</p>		
1-2 協力内容		
(1) 上位目標		
DSWにより、ろう者の社会参加促進のための手話指導者の手話支援者への指導及び手話支援サービスが継続される。		
(2) プロジェクト目標		
DSWにより、手話指導者の手話支援者への手話指導能力が向上される。		

¹ 本プロジェクトでは、ろう者に対して基礎的な通訳（コミュニケーション）支援ができる人材を「手話支援者」、より高度な通訳ができる人材を「手話通訳」と呼ぶ。

(3) 成果

- 1) 手話支援者育成及び手話支援サービス提供のための実施体制が社会福祉局により整備される。
- 2) 手話指導者の訓練が実施される。
- 3) 手話指導者により、手話支援者の訓練が実施される。
- 4) ろう者と手話に関する啓発活動が実施される。

(4) 投入

日本側：長期専門家 1 名、短期専門家 9 名、研修員受入 53 名、機材供与 0 億円
ローカルコスト負担 0.2 億円 総計 1 億円

相手側：カウンターパート配置 7 名、土地施設の提供、住居の提供、ローカルコスト負担なし

2. 評価

(1) 妥当性

協力期間を通じて本プロジェクトの妥当性は極めて高い。

第一に、本プロジェクトの目標はミャンマー側の開発政策と合致している。憲法（2008 年）で障害者を含む弱者支援が謳われているのをはじめとして、現行の国家開発計画（2011～2015 年）でも障害者の社会参加促進が目標とされている。また、次期国家開発計画（2015～2019 年）には手話支援サービスも含まれている。障害者のための国家活動計画（2010～2012 年）では、障害者が権利を平等に享受するため、また、一国民として国家の社会経済発展へ貢献するためのアクセス・機会を拡大することがねらいとされている。障害者のための国家アクションプランの次期計画（2013～2018 年）にもろう者を含む障害者の社会参加のための活動が含まれている。

第二に、ミャンマーろう者のニーズとも合致している。障害者の全国調査（2010 年）によると、国内には 120 万人の障害者があり、このうち聴覚障害を持つ者は約 13.4 万人いると推定される。障害者のなかでも社会サービスの存在を認識しているのはごく少数であり、サービスを受けている人々の数は更に少ない。これまで地域・家庭ごとにさまざまな手話が用いられていたことが、ろう者同士のコミュニケーションやろう者への支援サービスの提供が限定されてきたことの一因である。

第三に、日本側の支援政策とも合致している。日本政府は重要なパートナーである ASEAN の繁栄・安定・統合に貢献するという観点からも、ミャンマーに対する支援は意義深いとし、ミャンマーの民主化・持続的発展に向けた努力を後押ししている。2011 年には、国民が「直接恩恵を受ける基礎生活分野の案件を中心に」支援を実施することが決定された。また、2012 年以降の支援重点分野は、①国民の生活向上のための支援、②経済・社会を支える人材の能力向上や制度整備のための支援、③持続的経済成長のための必要なインフラや制度の整備等の支援である。本プロジェクトは①と②に合致する。

(2) 有効性

プロジェクト目標は達成されており、これは成果がほぼ達成されたことによるものであ

る。よって、本プロジェクトの有効性は高い。

プロジェクト目標は、達成されている。4つの成果のうち、成果1はほぼ達成され、成果2～4は達成された。なかでも成果2～4はプロジェクト目標達成に大きく貢献した。第一に、手話指導者は18カ月の訓練を終え（成果2）、現在は手話支援者訓練の講師を1年以上にわたり務めているが（成果3）、これも手話指導者にとっては格好の実務訓練となっている。手話支援者研修において参加者の満足度・理解度が高いのは手話指導者の能力向上によるものである。また、啓発活動においても手話指導者が講師を務めており（成果4）、これもまた手話指導に関する知識・技術を向上させるよい機会となっている。これらの成果を通じて手話指導者の能力向上が進んだ（プロジェクト目標）といえる。

他方、プロジェクト終了後の手話支援者訓練と手話支援サービス提供に関する詳細計画はDSWによりまだ策定されていないが（成果1）、手話指導者訓練と第一期生の手話支援者訓練は成功裡に実施された（この計画は上位目標の達成につながるものである）。

プロジェクト目標達成を促進した大きな要因は、手話指導者訓練が戦略的にデザインされたことである。手話指導者自身も実感しているように、ミャンマー国内での訓練、本邦研修、短期専門家による集中訓練が相乗効果を生みつつ、手話指導者の能力向上に貢献した。

(3) 効率性

ミャンマー・日本側双方の投入が質・量・タイミングの面で適切に行われた結果、4つの成果はほぼ計画どおりに達成された。よって、本プロジェクトの効率性は極めて高い。

投入が適切に行われた例として、第一に、本プロジェクトのフェーズ1の成果・経験が活用された。具体的には、フェーズ1のタスクフォースの中でも指導技術の高かったメンバーが手話指導者として選出され、手話支援者訓練の素地となっている。また、フェーズ1ではヤンゴンとマンダレーを活動場所としていたが、本プロジェクトではヤンゴン1カ所とすることで、頻繁な移動にかかる時間を短縮することにつながった。第二に、本邦研修に参加した手話支援者候補は帰国後に他の手話支援者候補と知見を共有した。第三に、手話指導者も手話支援者候補も訓練途中で脱落することなく、現在まで活躍している。彼らのなかには所属先がなく、訓練中の給与または交通費が支払われずにいるが、インタビューによると「学びが動機となり訓練を継続できている」とのことであった。

3. 特記事項

3-1 提言

(1) DSW への提言

- ・ プロジェクト終了までに手話支援サービス提供のための詳細活動計画を作成する。
- ・ プロジェクト終了後も手話支援者候補及び手話支援コーディネーターを適時、適切に人選する。
- ・ プロジェクト終了後、手話支援者訓練及び手話支援サービス提供に関する情報共有の場を設定する。

(2) プロジェクトへの提言

- ・ DSW が手話支援サービス提供のための詳細活動計画を作成する際、技術的支援を行う。

- ・ 手話支援コーディネーターに対する OJT（On-the-Job Training）を実施する。

(3) JICA への提言

- ・ プロジェクト終了後、手話支援者訓練と手話支援サービス提供についてのモニタリングを行う。

3-2 教訓

- ・ 本邦研修前の準備と事後の振り返りを戦略的に組み合わせることで、人材育成における研修の効果をより高めることができる。
- ・ 受益者（当事者）がプロジェクトの主体となることで、彼ら自身がエンパワーされ、プロジェクトのサービス・成果をより使い勝手のよいものにし、他受益者や社会一般の意識啓発につながる。
- ・ プロジェクト目標にとどまらず、上位目標の達成に必要な手段は何かを見越して計画を策定することにより、プロジェクト終了後の目標達成の基盤が築かれる。

4. 添付書類

なし。

Summary of the Terminal Evaluation

1. Outline of the Project		
Country: Myanmar		Project title: Project for Supporting Social Welfare Administration - Promotion of Social Participation of the Deaf Community - Phase 2
Sector: Social Security		Aid scheme: Technical Cooperation Project
Department in charge:		Cooperation amount: 100 million yen
Cooperation Duration	4 August 2011 to 3 August 2014	Counterpart organizations: Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement
		Relevant Japanese Organization: Fureai-no-Sato (Trailer sites managed by Shirosato Town), Institute of Developing Economies-Japan External Trade Organization, Japanese Federation of the Deaf, Kawagoe Municipal Office, Meisei Gakuen School for the Deaf, Ministry of Health, Labor and Welfare, National Rehabilitation Center for Persons with Disabilities, NHK (Japan Broadcasting Corporation), Tokyo Shuwa Tsuyaku-to Haken Senta, Yokohama Rapport: Sports and Cultural Center for the Disabled
		Relevant Assistance: None
1-1 Background and Outline of the Project		
<p>Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement (hereinafter referred to as DSW), has provided various social welfare services to children, youth, women, elderly persons and persons with disabilities. However, it is not able to meet the needs of each group due to the lack of capacity to provide specialized services. In particular, the services for persons with disabilities remain behind, and the capacity building of social welfare administrators is strongly requested.</p> <p>The Project for Supporting Social Welfare Administration: Promotion of Social Participation of the Deaf Community was implemented from December 2007 to December 2010. In that project, various results were achieved in dissemination of Myanmar Sign Language. However, capacity development of human resources was still needed to support communication between the Deaf and Hearing. Under these circumstances, the Myanmar government requested continuous support from the Japanese government to train sign language trainers (hereinafter referred to as SLT) for further dissemination of sign language and training of sign language supporters (hereinafter referred to as SLS¹). The Project was launched in August 2011.</p>		
1-2 Contents of Cooperation		
(1) Overall Goal		
DSW sustains training to Sign Language Supporters and sign language supporting services for promoting social participation of the Deaf.		

¹ In the Project, "sign language supporters" are defined as persons who can provide the deaf with support with basic interpretation or communication. Those who can interpret in a more advanced way are called "sign language interpreters".

(2) Project Purpose

Capacity of Sign Language Trainers to train Sign Language Supporters is improved by DSW.

(3) Outputs

- 1) System to train Sign Language Supporters and provide sign language support service is established by DSW.
- 2) Training of Sign Language Trainers is implemented.
- 3) Training of Sign Language Supporters is implemented by Sign Language Trainers.
- 4) Awareness raising activities on the Deaf and sign language are implemented.

(4) Inputs

Japanese side: Total amount of inputs: 100 million yen

Experts: 1 long-term experts and 9 short-time experts

Training in Japan: 53 trainees

Equipment: None

Local cost: 20 million yen

Myanmar side:

Number of C/P personnel including those of related organizations: 7

Facility offered: office space

Project cost: None

2. Evaluation

(1) Relevance

As explained below, the Project has been relevant with the Myanmar government's policy on social welfare, needs of the Deaf community, as well as Japan's assistance policy; therefore the Project relevance is very high.

First, the Constitution of Myanmar of 2008 stipulates in the Section 32 that the State shall care for vulnerable people including persons with disabilities. Furthermore, the current National Development Plan 2011-2015 includes programs to promote social participation of persons with disabilities through removing physical, social and informational barriers and improving vocational skills. Also, the National Plan of Action for Persons with Disabilities 2010-2012 showed a nationwide focus on persons with disabilities, aiming to increase mobility, accessibility and opportunities for persons with disabilities. Its subsequent National Plan of Action for Persons with Disabilities 2013-2018 will contain actions to be taken to promote social participation of persons with disabilities including the Deaf.

Second, according to the Myanmar National Disability Survey (2010) the prevalence of hearing disabilities was 0.24%, which indicates 134,750 persons have hearing difficulties. The survey revealed that "only a small minority of persons with disabilities is aware of the existence of social services" and even fewer have ever had contact with agencies offering services. In Myanmar, various sign languages exist by region and community, which has hindered communication among the Deaf and also effective support provision for the Deaf.

Third, the Japanese government considers that assistance for Myanmar is very significant, as Myanmar could contribute to ASEAN's development, stability and integration. The following three are priority areas of assistance: (i) assistance improvement of people's livelihoods, (ii) assistance for capacity building and institutional development to sustain the economy and society, and (iii) assistance for

infrastructure and institutional development for sustainable economic development.

(2) Effectiveness

The Project Purpose has been achieved, which has been realized mostly by the Outputs produced. Therefore, the Project effectiveness is high.

The Project Purpose and most of the Outputs have been achieved. Three Outputs have definitely contributed to the achievement of the Project Purpose. First, SLT have gone through 18-month training with successful level of understanding and satisfaction. They have worked as trainers for SLS candidates for more than one year, which is continuous on-the-job training for them. High degree of understanding and satisfaction and understanding of SLS candidates imply good performance of SLT as trainers. Also, lectures in the awareness raising activities have been good opportunities for SLT for improving their knowledge and skills in sign language teaching. These are the factors for the achievement of the Project Purpose.

On the other hand, the concrete and detailed plan has not yet been officially approved by DSW for provision of sign language support services and for training of SLS. However, the training of SLT and SLS of the first batch has been implemented successfully.

It should be noted that the achievement of the Project Purpose has been realized through strategic implementation of the training of SLT. Many interviewed SLT commented that the combination of daily training by the long-term expert, training to Japan and training by the short-term experts worked very well.

(3) Efficiency

Most of the Project Outputs have been produced as expected with appropriate use of inputs. Considering the following points, overall, the Project efficiency is very high.

So far, three of the Project Outputs have been produced as expected, except that the Output 1 has been partly achieved. So as to the Inputs, the human, material and financial resources have been allocated as planned by the Myanmar and Japanese sides in terms of quantity, quality and timing.

The Inputs have been utilized in line with the Project objectives. The following are some examples. First, SLT were selected from those who had better teaching skills among the task force members of the previous phase of the Project. Their experience in making the Myanmar Sign Language conversation book and teaching the sign language has been fundamental for capacity building of SLT themselves. Second, Based on the lessons from the previous phase, the training has been conducted only in Yangon. This has enabled efficient implementation of the training by avoiding frequent travels within the country. In order to respond to the needs in other areas, instead, sign language classes and other awareness raising activities have been organized outside Yangon. Third, SLS candidates who participated in the training in Japan have shared their learning with their colleague after they came back to Myanmar.

One favorable factor is that neither SLT nor SLS candidates have dropped out from the training. Even though some SLT and SLS have participated in the training without salary, learning has been a motivation for them. This has contributed to efficient achievement of the Outputs 2 and 3.

3. Remarks

3-1 Recommendations

(1) To DSW

- Develop the detailed operational plan for provision of sign language support services.
- Select at the right timing appropriate SLS candidates and support service coordinators.
- Establish a committee on SLS training and support service provision.

(2) To the Project

- Provide technical support for DSW in developing the detailed operational plan.
- Conduct On-the-Job-Training of the support service coordinators.

(3) To JICA

- Monitor the implementation of SLS training and provision of sign language support services.

3-2 Lessons Learnt

- By strategically dominating pre- and post-training with the training in Japan, synergetic effects can be expected in the aspect of human resource development.
- Active participation of the beneficiary group as agents of the Project can not only empower themselves but also bring about positive impacts.
- The Project design which foresees necessary steps for the achievement of the Overall Goal is effective to ensure the project sustainability.

4. Attachment

None.

第1章 終了時評価調査の概要

1-1 調査団派遣の経緯と目的

ミャンマー連邦共和国(以下、「ミャンマー」と記す)社会福祉救済復興省社会福祉局(Department of Social Welfare, Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement : DSW)は、幼児、児童、青少年、女性、高齢者、障害者、薬物中毒者に対する各種公共福祉サービスを提供しているが、同省の各施設は専門の福祉サービスを提供するキャパシティが不足しており、福祉を必要とする各グループに対し、十分に対応ができていない。特に障害者への公的サービスの提供は大きく立ち遅れており、この分野に携わる行政官の人材育成が強く求められていた。

かかるニーズに対し、DSW から社会福祉行政官育成に係る要請が提出され、2006 年度案件として採択された。その後の DSW との協議を通じて、社会福祉行政は広範にわたるため、行政官の育成のためには、実際の問題解決の過程を通じて経験の蓄積と能力向上を図ることが効果的であるとの合意に至り、DSW が積極的に取り組んでいる手話の統一及び普及に焦点をあて、本プロジェクトのフェーズ1となる「社会福祉行政官育成プロジェクト」(2007年12月～2010年12月)が実施された。

「社会福祉行政官育成プロジェクト」では、長期専門家1名(業務調整/研修計画)及び手話教授法等の短期専門家延べ11名の派遣、並びに本邦でのカウンターパート(Counterpart : C/P)研修等を実施し、ミャンマー手話の普及、啓発の分野で大きな成果を上げたが、ろう者の社会参加を更に促進していくには依然として課題は多かった。特に聴者とろう者のコミュニケーションを支援する人材はほとんど育成されておらず、ろう者の社会参加を妨げる一因となっていた。このため、DSW から、ろう者の更なる社会参加の促進のための手話通訳者の育成を目的としたフェーズ2の要望が提出され、採択された。

しかしながら、短期間で手話通訳者を育成することは困難である。そのため、2010年12月の詳細計画策定調査において、将来的な手話支援者³の育成をめざし、手話支援者に手話の指導を行う人材の育成を目的としてプロジェクトを実施することで合意に至り、2011年8月から3年間の計画で「社会福祉行政官育成プロジェクトフェーズ2」(以下、「本プロジェクト」と記す)が開始された。

本プロジェクトでは、これまで、長期専門家1名(ろう者支援/業務調整)及び手話通訳トレーニング等の短期専門家の派遣並びに5回の本邦研修を実施しており、着実に手話指導者の能力強化が進んでいる。また、2013年10月の第4回合同調整委員会(Joint Coordination Committee : JCC)では、DSW より、将来的な手話支援サービスの提供に向けたアクションプランが提案された。

今回実施する終了時評価調査は、2014年8月のプロジェクト終了を控え、プロジェクト活動の実績、目標・成果の達成状況を確認、評価するとともに、今後のプロジェクト活動に対する提言及び類似事業の実施にあたっての教訓を導くことを目的とする。

³ 本プロジェクトでは便宜上ろう者に対して基礎的な通訳(コミュニケーション)支援ができる人材を「手話支援者」、より高度な通訳ができる人材を「手話通訳者」と呼ぶ。

1-2 調査団構成と日程

(1) 調査団構成

終了時評価の調査団構成は次のとおりである。

表 1-1 調査団構成

担当分野	氏名	所属
団長・総括	久野 研二	JICA 国際協力専門員（社会保障）
協力企画	本池 愛	JICA 人間開発部高等教育・社会保障グループ社会保障課
評価分析	鈴木（野口）純子	一般財団法人国際開発機構 主任研究員

(2) 現地調査日程

現地調査は 2014 年 2 月 12 日から 2 月 26 日まで実施された（表 1-2）。

表 1-2 現地調査の日程

		久野	本池	鈴木（野口）
2/12	水			・ヤンゴン到着 ・インタビュー（専門家）
2/13	木			・インタビュー（専門家、手話指導者） ・手話支援者訓練の視察
2/14	金			・インタビュー（手話支援者、NGO）
2/15	土			・資料整理
2/16	日			・資料整理 ・移動（ヤンゴン→ネピドー）
2/17	月			・インタビュー（ミャンマー国営テレビ・ラジオ局）
2/18	火	・ヤンゴン到着		・インタビュー（DSW）
2/19	水	・JICA ミャンマー事務所での打合せ ・在ミャンマー日本大使館への表敬訪問 ・インタビュー（専門家、メアリーチャップマンろう学校） ・移動（ヤンゴン→ネピドー）		・インタビュー（DSW）
2/20	木	・DSW との協議		
2/21	金	・DSW との協議		
2/22	土	・M/M 案の作成		

2/23	日	・ M/M 案の作成
2/24	月	・ インタビュー（教育省）
2/25	火	・ 第 5 回 JCC への参加 ・ M/M 署名
2/26	水	・ 移動（ネピドー→ヤンゴン） ・ JICA ミャンマー事務所への報告 ・ 在ミャンマー日本大使館への報告

1-3 主要面談者

主要面談者リストは、付属資料 1 のとおりである。

1-4 プロジェクトの概要

(1) プロジェクトのデザイン

本プロジェクトの目標と成果は表 1-3 のとおりである。

表 1-3 プロジェクトの目標の概要

	到達目標
上位目標	DSW により、ろう者の社会参加促進のための手話指導者の手話支援者への指導及び手話支援サービスが継続される
プロジェクト目標	DSW により、手話指導者の手話支援者への手話指導能力が向上される
成果	1. 手話支援者育成及び手話支援サービス提供のための実施体制が DSW により整備される 2. 手話指導者の訓練が実施される 3. 手話指導者により、手話支援者の訓練が実施される 4. ろう者と手話に関する啓発活動が実施される

本プロジェクトでは、手話指導者の能力向上を中心的な活動と位置づけている。手話指導者が、コミュニティでの基礎的なコミュニケーション支援を行える者（手話支援者）を育成する計画である。ただし、手話支援者の育成には長期的視点が必要となるため、手話指導者の育成をプロジェクト目標とし、手話支援者への指導は手話指導者の能力強化の一環（Learning by Teaching）と位置づけている。

プロジェクトでは、手話指導者の育成（プロジェクト目標）のため、社会福祉局の体制整備（成果 1）、手話指導者の養成（成果 2）、手話支援者の育成（成果 3）、手話の啓発活動（成果 4）の 4 つの成果が中間目標として設定され、これらを達成するための活動が実施されている。なお、手話指導者の養成は成果 2 の直接の訓練だけでなく、手話指導者が手話支援者訓練（成果 3）や啓発活動（成果 4）で講師を務めることにより、実地訓練（On-the-Job Training: OJT）として能力向上がより一層促進される構図となっている。これらの成果を通じて、相乗効果としてプロジェクト目標である手話指導者の育成を図っている。

プロジェクト終了後の目標（上位目標）としては、手話支援者をろう者に派遣する手話支援サービスの提供をめざすことになる。手話支援者は、将来的に学校、病院、役所等の施設において、ろう者支援を実施することが計画されている。

これらを図示すると、図 1-1 のようになる。破線の囲みと矢印はプロジェクトの協力範囲外（プロジェクト終了後にミャンマー側で取り組まれることが期待される活動）の部分を示している。プロジェクト目標達成後に、プロジェクトにより育成された手話指導者が、手話支援者の育成を継続することにより、手話支援サービスが提供される（上位目標に到達すること想定されている）。

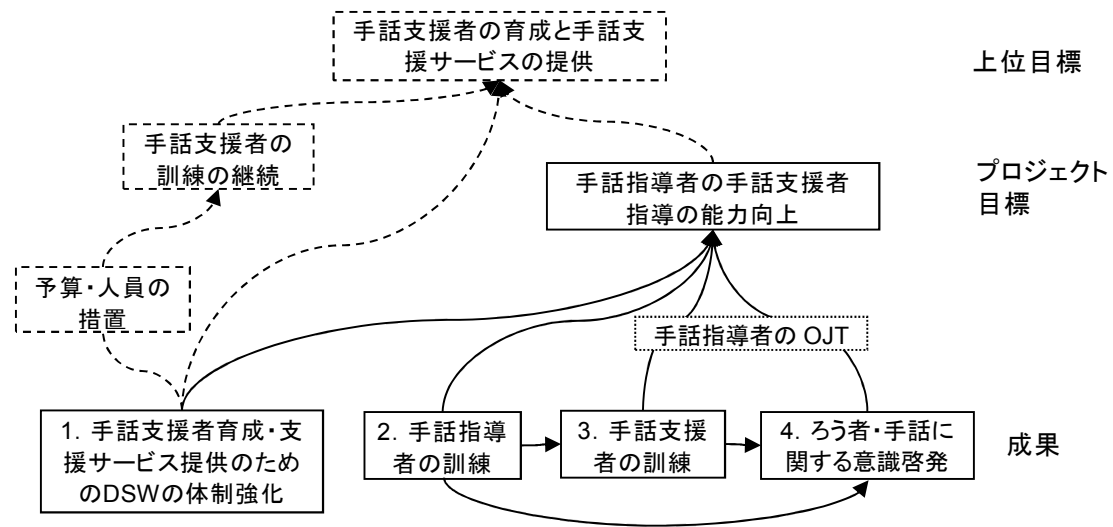


図 1-1 プロジェクトの成果・目標の構成と外部要因との関係

(2) プロジェクト・デザイン・マトリックス (PDM) の変遷

本プロジェクトでは、最初の PDM Version 0 が詳細計画策定調査時に作成された（2010 年 12 月）。その後、中間レビュー時に PDM Version 0 に目標値を設定した改定案が、PDM Version 1 として承認された（2013 年 1 月）。PDM の改訂内容は付属資料 2 のとおりである。

第2章 評価の方法

2-1 終了時評価調査の方法

本調査は、『新 JICA 事業評価ガイドライン：第1版』（2010年6月）に基づいて実施した。すなわち、①プロジェクトの現状把握・検証を行い、②それらを DAC 評価5項目による評価基準から判断し、③提言や教訓を導き出して対象プロジェクト及び類似プロジェクトにフィードバックするという枠組みの下、評価調査を行った。終了時評価という時期的な性格から、目的は「プロジェクトの目標が協力期間終了までに達成されるかを総合的に検証し、協力終了の適否や協力延長の必要性の判断に活用する」こととされた。なお、現行の PDM Version 1 を事業計画として捉え、評価調査のデザインを行った。

評価5項目の定義は次のとおりである。終了時評価であること、対象プロジェクトはおおむね計画どおりに進捗していることから、特にインパクトと持続性に重点を置いた。

表2-1 DAC 評価5項目による評価の視点

評価項目	視点
妥当性	開発援助と、ターゲットグループ・相手国・ドナーの優先度並びに政策・方針との整合性の度合い。
有効性	開発援助の目標の達成度合いを測る尺度
効率性	インプットに対する成果（定性並びに定量的）を計測する。開発援助が期待される結果を達成するために最もコストのかからない資源を使っていることを示す経済用語。最も効率的なプロセスが採択されたかを確認するため、通常、他のアプローチとの比較を必要とする。
インパクト	開発援助によって直接または間接的に、意図的または意図せずに生じる、正・負の変化。開発援助が、地域社会・経済・環境並びにその他の開発の指標にもたらす主要な影響や効果を含む。
持続性	ドナーによる支援が終了しても、開発援助による便益が継続するかを測る。開発援助は、環境面でも財政面でも持続可能でなければならない。

出所：JICA（2010）『新事業評価ガイドライン：第1版』

2-2 主な調査項目

本調査においては、以下の評価設問を中心に調査を実施した。

- (1) 投入実績及び成果、プロジェクト目標、上位目標に関する達成状況あるいは達成見込みはどうか。
- (2) 活動は計画どおりに実施されたか。プロジェクトのマネジメントとは適切に行われたか。コミュニケーションは適切に行われた。実施機関の当事者意識は醸成されたか。
- (3) 評価5項目の各視点から見てプロジェクトの達成状況はどうか。残りの期間や終了後に留

意すべき事項は何か。

より詳細な評価設問は、それぞれの必要なデータ、情報源・データ収集方法とともに評価グリッドに示すとおりである（付属資料3 協議議事録（M/M）Annex 2 参照）。

2-3 データ収集方法

以下の情報源及びデータ収集方法を用いて情報を収集した。

- (1) 討議議記録（R/D）、PDM、活動計画表（PO）、M/M等のプロジェクト計画文書のレビュー
- (2) プロジェクト作成の報告書（活動進捗報告書、短期専門家報告書）のレビュー
- (3) 日本人専門家、手話指導者・手話支援者候補、C/P、関係機関からの質問票回答・インタビュー

上記方法で収集されたデータやその分析結果は、日本側の終了時評価調査団によってまとめられたあと、日本・ミャンマー側双方の関係者により事実確認と協議が行われた。この結果を踏まえ、DSW 局長及び終了時評価調査団長が調査結果報告を含む協議議事録（Minutes of the Meeting：M/M）に署名を行った。

第3章 プロジェクトの実績と現状

3-1 投入実績

3-1-1 ミャンマー側投入

これまでのところ、以下のとおりの人員配置と施設提供が行われている。

(1) 人員配置

プロジェクト・ディレクター、プロジェクト・マネジャーをはじめ、合計7名のカウンターパートが配置されている。プロジェクト期間中に何名かの異動があったが、カウンターパートとして任命された職位にある人が JCC への参加等、責務を果たしている（付属資料3 協議議事録（M/M）Annex 3 参照）。

プロジェクトの活動実施や運営の実務カウンターパートは手話指導者である。活動の大半は手話指導者と手話支援者の訓練であるが、その計画・実施・評価は毎日の定例会議を通じて管理されている。

(2) 施設提供

JICA 専門家をはじめとするプロジェクトスタッフの執務室、訓練を実施する部屋（3部屋）が、水道光熱費とともに DSW より提供されている。このほか、ヤンゴン市内に住居を持たない手話指導者及び手話支援者に対して DSW の住居が提供されている。

3-1-2 日本側投入

プロジェクト開始時から 2014 年 2 月の終了時評価調査の実施までに、長期専門家は 1 名、短期専門家は延べ 9 名派遣されている。このほか、研修員受入れ延べ 53 名、現地業務費 2,177 万円が投入されている。各投入については以下のとおりである。なお、機材供与は行われていない。

(1) 専門家派遣

長期専門家は 1 名が派遣されている。ろう者支援の専門家が業務調整を兼務している。

短期専門家はこれまで延べ 9 名が派遣された。いずれも手話指導者の養成を目的とした専門家派遣であり、ろう者と聴者の手話指導者に対して別々に指導を行った（指導科目はそれぞれ手話教授法、手話通訳訓練）。各派遣は 1 週間程度の限られた期間であったが、計画どおりに効率よく実施された。

各専門家の派遣時期・期間等の詳細は、付属資料 3 協議議事録（M/M）Annex 4 のとおりである。

(2) 研修員受入れ

表 3-1 のとおり、開始年度から毎年度、研修員を受け入れている。研修員の構成は DSW 行政官から 2 名、手話指導者の全員 9 名である（1 名増加前は 8 名）。DSW 行政官は 6 日間程度の短い日程であり、手話指導者は 2~4 週間の日程であった。手話指導者の研修内容はろう者と聴者の役割の違いに合わせて設定されている。

なお 2013 年に手話支援者訓練が開始されてからは、手話指導者が本邦研修に参加している間は、ミャンマー国内の講師を招聘してミャンマー言語等の講義を行うことにより、訓練が途切れなく実施されている。

表 3-1 研修員受入れの実績

年度	研修期間	研修員	研修名
2011	2012 年 1 月 19 日～ 1 月 25 日 (7 日間)	2 名 (DSW 行政官)	DSW 行政官対象手話教授法 (上級レベル)
	2012 年 1 月 19 日～ 2 月 18 日 (31 日間)	8 名 (手話指導者)	手話指導者対象手話教授法 (上級レベル)
2012	2012 年 6 月 24 日～ 6 月 29 日 (6 日間)	2 名 (DSW 行政官)	DSW 行政官対象手話教授法 (上級レベル II)
	2012 年 6 月 24 日～ 7 月 19 日 (26 日間)	8 名 (手話指導者)	手話指導者対象手話教授法 (上級レベル II)
	2012 年 11 月 18 日～ 11 月 23 日 (6 日間)	2 名 (DSW 行政官)	DSW 行政官対象手話指導者訓練手法 I
	2012 年 11 月 18 日～ 12 月 2 日 (15 日間)	9 名 (手話指導者)	手話指導者対象手話指導者訓練手法 I
2013	2013 年 6 月 15 日～ 6 月 21 日 (7 日間)	2 名 (DSW 行政官)	DSW 行政官対象手話指導者訓練手法 II
	2013 年 6 月 15 日～ 6 月 30 日 (16 日間)	9 名 (手話指導者)	手話指導者対象手話指導者訓練手法 II
	2013 年 12 月 8 日～ 12 月 21 日 (14 日間)	2 名 (DSW 行政官)	DSW 行政官対象手話指導者訓練手法 III
	2013 年 12 月 8 日～ 12 月 21 日 (14 日間)	9 名 (手話指導者)	手話指導者対象手話指導者訓練手法 III
	合計	53 名	

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

(3) 現地業務費

現地業務費は 2014 年 2 月までに 2,177 万円が投入されている (付属資料 3 協議議事録 (M/M) Annex 4)。内容はミャンマー国内講師の写真、啓発活動や JCC 参加等の国内交通費・車両借上費、通信連絡費等である。

3-2 成果の達成度

終了時評価時点の各成果の達成状況は次のとおりである。

3-2-1 成果1

成果1：手話支援者育成及び手話支援サービス提供のための実施体制が DSW により整備される	
指標	1-1 40名以上の手話支援者候補が DSW により選定される 1-2 手話支援者育成及び手話支援サービス提供の計画
実績	1-1 第1期の手話支援者候補24名が選出済みである。第2期の候補20名は2014年3月までに選出される。 1-2 「手話支援サービス提供のアクションプラン（Future Action Plan for Sign Language Support Services）（2014～2017年）」が2013年10月に DSW により作成された。このアクションプランは、5年間で100名の手話支援者を養成することを目標とした計画概要であり、手話指導者育成、手話支援者育成、手話支援サービス提供の3本柱から構成されている。

上記2つの指標を用いて検証すると、部分的に達成されている。つまり、成果1は部分的に達成された。

第2期訓練に向けた手話支援者候補の選出が2013年12月に設定されていた期限から遅れている。DSWによると手話支援者候補は2014年3月までに選出され、翌月4月から訓練が開始される見込みである。

「手話支援サービス提供のアクションプラン（2014～2017年）」は2013年6月に実施された本邦研修での成果〔「手話支援サービス提供のための長期計画」（Long-term Plan for Provision of the Sign Language Support Service）〕を基に DSW により作成され、2013年10月の JCC で発表されたものである。アクションプランはビジョン、ゴール、ゴール達成に向けたステップが示されているのみであり、今後、実施に向けてより詳細な計画が DSW 主導により作成されることになっている。表3-3はアクションプランから抜粋したビジョンとゴールである。

表3-2 「手話支援サービス提供のアクションプラン（2014～2017年）」抜粋

10年後のビジョン	1. 手話支援サービスが5地域（ヤンゴン、マンダレー、バゴ、エーヤワディー、シャン）で提供される。これにより、ろう者が保健、教育、法律、雇用に関するサービスをより享受できるようになる。 2. 手話指導者及び手話支援者の国家認証制度が設立される。
5年後のゴール <人材育成>	1. 少なくとも手話指導者20名（聴者の指導者4～6名、ろう者の指導者14～16名）がヤンゴンにて手話支援者訓練を実施する。 2. 少なくとも100名の手話支援者が5地域で手話支援サービスを提供する。
<手話支援サービスの提供>	1. 手話支援サービスのモデルがヤンゴンとマンダレーで確立する。 2. 手話支援サービスがバゴ、エーヤワディー、シャンに拡大する。

<p>くろう文化と手話の促進></p>	<p>1. 第 1 期の手話支援者がろう者と手話に関するワークショップをヤンゴン、マンダレー、バゴ、エーヤワディー、タウンジー、ネピドーで実施する。</p>
------------------------	--

出所：DSW 作成の「手話支援サービス提供のアクションプラン（2014～2017年）」を基に作成。

上記アクションプランの実効性を高め、手話支援サービスの提供を支援するため、プロジェクトでは以下の取り組みが実施された。

- 1) 手話支援コーディネーターの業務内容が明確化された。それはすなわち、①手話支援者派遣の調整、②手話支援者訓練への支援、③書類作成、会計といった事務、④社会一般に対する手話教室の運営である。この業務内容は第 4 回 JCC（2013 年 10 月）で共有された。なお、手話支援コーディネーターについては 6 名が候補者として検討されているが、確定していない。
- 2) 手話支援サービス申請を説明したリーフレット案がミャンマー語と英語で作成されている。ろう者とその家族が①手話支援サービスの申請方法、②手話支援サービスの事例、③手話支援サービス提供の手順についての情報を得ることができる内容となっている。
- 3) 手話支援サービス提供に関連するさまざまな様式が作成された。例えば、①申請用紙、②利用者の通知書、③手話支援者の通知書、④DSW への報告書、⑤手話支援者の自己評価用紙、⑥手話指導者による評価用紙である。

3-2-2 成果 2

<p>成果 2：手話指導者の訓練が実施される</p>	
<p>指標</p>	<p>2-1 訓練された手話指導者が 8 名以上となる。 2-2 訓練参加者の満足度が 4 以上となる（5 段階）。 2-3 訓練参加者の理解度が 4 以上となる（5 段階）。</p>
<p>実績</p>	<p>2-1 9 名の指導者が研修を修了し、現在、第 1 期手話支援者候補を指導している。 2-2 指導者訓練の参加者の満足度は 4.1 であった。 2-3 指導者訓練の参加者の理解度は 4.1 であった。</p>

手話指導者訓練はこれまで計画どおりに実施され、訓練参加者の満足度・理解度は目標値を上回った。よって、成果 2 は達成された。

手話指導者の訓練内容は、①手話教授法、②手話翻訳・通訳理論、③手話翻訳者・通訳者の指導法、④手話支援者の評価となっている。訓練内容の詳細は付属資料 3 協議議事録 (M/M) Annex 6 のとおりである。

PDM で設定された指標以外の検証として、手話指導者自身の評価によると、9 名全員が「訓練によって手話及び教授法に関する知識・技術を向上させた」「指導者としての自信を得た」と回答している。また、「手話支援者訓練のなかで自己反省に基づいて改善対応ができるようになった」「ろう者及び言語としての手話に対する理解を深めた」とコメントしている。JICA 専門家も、「指導者は以前よりも具体的で手話支援者候補に学びを促す方法で手話支援者訓練

を実施できるようになった」と認識している。

表 3-3 は、手話指導者の自己評価結果である。これも手話指導者訓練が効果的に実施されたことを示す指標となっている。

表 3-3 手話指導者の理解度に関する自己評価

	はい	いいえ	合計
手話指導者訓練の内容を容易に理解できたか	9	0	9
手話指導者訓練を通じて知識・技術を向上させたか	9	0	9
手話指導者としての自信を得たか	6 (とても) 3 (ある程度)	0	9

出所：手話指導者へのインタビューを基に作成。

3-2-3 成果 3

成果 3：手話指導者により、手話支援者の訓練が実施される	
指標	3-1 手話支援者候補の 70%以上が訓練を修了する。 3-2 訓練参加者の満足度が 3.5 以上となる (5 段階)。 3-3 訓練参加者の理解度が 3.5 以上となる (5 段階)。
実績	3-1 手話支援者候補 24 名全員 (100%) が訓練に参加している (2014 年 2 月現在)。 3-2 手話支援者訓練の参加者の満足度は 4.1 であった。 3-3 手話支援者訓練の参加者の理解度は 3.9 であった。

第 1 期の手話支援者はこれまで計画どおりに実施され、訓練参加者の満足度・理解度は目標値を上回った。よって、成果 3は達成された。

手話支援者候補の満足度・理解度の評価結果の詳細は表 3-4、3-5 のとおりである。満足度、理解度とともに全期間を通じて目標値より上回っている。全体として、手話に関する訓練の方が若干高い満足度であったようである。

表 3-4 手話支援者訓練に対する参加者（手話支援者候補）の満足度（自己評価）

	2013 2 月	2013 3 月	2013 4～5 月	2013 6～7 月	2013 8～9 月	2013 10～11 月	期間全体	目標値
手話に関する訓練	4.0	4.2	4.2	4.0	4.1	4.2	4.2	3.5
手話翻訳・通訳に関する訓練	3.8	4.3	4.3	4.0	4.0	4.0	4.1	3.5
訓練全体	3.8	4.0	4.2	3.8	3.9	4.1	4.1	3.5

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

表 3-5 手話支援者訓練に対する参加者（手話支援者候補）の理解度（自己評価）

	2013 2月	2013 3月	2013 4～5月	2013 6～7月	2013 8～9月	2013 10～11月	期間全体	目標値
手話に関する訓練	3.9	4.0	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0	3.5
手話翻訳・通訳に関する訓練	4.0	4.2	4.2	3.9	4.0	4.0	4.0	3.5
訓練全体	3.7	4.0	3.8	3.8	4.3	3.9	3.9	3.5

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

インタビューを行った手話支援者候補 5 名は「訓練により新たな知識・技術を得た」と回答している。しかしながら、表 3-8 で示すように手話支援者候補の理解度には個人差がある。特に、ミャンマー言語スキルについては最高点が 5 点満点中 5 点であったが、最低点は 1 点であった。

3-2-4 成果 4

成果 4：ろう者と手話に関する啓発活動が実施される	
指標	4-1 ろう者ワークショップが 12 回以上、手話教室が 50 講座以上実施される。 4-2 啓発活動に 1,000 名以上が参加する。 4-3 ワークショップ参加者の満足度が 3.5 以上となる（5 段階）。 4-4 ろう者ワークショップ参加者の理解度が 3.5 以上となる（5 段階）。
実績	4-1 ワークショップ 13 回（ろう者ワークショップ 8 回、手話ワークショップ 5 回）、手話教室 88 講座が実施された（2014 年 2 月現在）。 4-2 累計でワークショップに 691 名、手話教室に 785 名が参加した。 4-3 ワークショップ、手話教室の参加者の満足度はそれぞれ 4.0、3.4 であった。 4-4 ワークショップ、手話教室の参加者の理解度はそれぞれ 3.8、3.6 であった。

ろう者と手話に関する啓発活動はヤンゴン、マンダレーを含む 5 カ所で多数実施され、これらの参加者の理解度・満足度とともに、1 つの項目を除いて、目標値を上回った。手話教室に関する満足度のみ計画値を下回ったが、その差異は 0.1 ポイントと小さなものである。よって、成果 4 は達成された。

ワークショップと手話教室はヤンゴンとマンダレーだけでなく、モンユワ、ラーショー、ラシオ、パアンでも開催された（表 3-6）。マンダレーでの啓発活動には、プロジェクトのフェーズ 1 のタスクフォースメンバーがリソースパーソンとして参加した。なお、手話指導者がワークショップや手話教室のファシリテーターや講師を務めている。

表 3-6 ろうと手話に関するワークショップ・教室の開催数

	場所	ワークショップ・手話教室	参加者数
ろうに関するワークショップ	マンダレー	5	317
	ヤンゴン	3	170
手話教室	マンダレー	1	34
	ヤンゴン	1	61
	モンユワ	1	31
	ラーショー	1	38
	パアン	1	40
合計		13	691
手話教室	ヤンゴン	41	331
	マンダレー	36	345
	モンユワ	3	31
	ラーショー	6	38
	パアン	2	40
合計		88	785

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

上記のワークショップ、手話教室以外にも、2013年、DSWは独自予算により手話ワークショップを実施した（マンダレー、ヤンゴン、ザガイン）。

3-3 プロジェクト目標

プロジェクト目標：DSWにより、手話指導者の手話支援者への手話指導能力が向上される	
指標	<ol style="list-style-type: none"> 1 手話指導者の指導力が向上する（指導者訓練を修了した参加者の80%が指導者としての最低レベル（5段階の3.0）に到達する）。 2 手話支援者の手話能力が向上する（手話支援者訓練を修了した参加者の80%が手話支援者の最低レベル（5段階の3.0）に到達する）。
Achievement	<ol style="list-style-type: none"> 1. 手話指導者全員の態度、言語能力の平均スコアはそれぞれ3.7、3.6であった。上位80%（7名）に限定すると、これらの数値は3.9、3.7であった。 2. 手話支援者候補全員の社会言語能力、ミャンマー語の言語能力、訓練中の態度、社会的スキルの平均スコアはそれぞれ2.9、3.2、3.4、3.2であった。上位80%（19名）に限定すると、これらの数値は3.0、3.6、3.5、3.3であった。

手話指導者の指導能力の評価基準は JICA 短期専門家により選定された。また、手話支援者候補の手話能力の評価基準は、JICA 長期専門家と手話指導者により開発された。PDM Version 1 では目標数値が設定されていなかったが、本評価調査にあたりプロジェクトに確認したところ、「手

話指導者としての最低レベル」と「手話支援者としての最低レベル」はいずれも 3.0 と設定されていた。

手話指導者、手話支援者候補の下位 20%を除くと、いずれも目標値を上回っている。目標値と全員の平均値を比較しても、手話支援者候補の評価のうち 1 項目（社会言語能力）を除いて、目標値を上回った。よって、プロジェクト目標は達成された。

上述のとおり、手話指導者の評価は JICA 短期専門家 3 名によって行われた。表 3-7 は 3 名による評価の平均を表したものである。態度、言語能力の評価はそれぞれ 3.7、3.6 であり、目標値を上回っている。特に、聴解力、役割の認識、理解力の得点が高かった。上位 80%に限定すると、態度、言語能力の評価はそれぞれ 3.9、3.7 であった。

評価結果（得点）は手話指導者のなかでも個人差があるため、得点の低かった手話指導者に対しては夜間や週末を使って補習が行われている。

表 3-7 JICA 短期専門家による手話指導者の評価

	2013 年 3～8 月			2013 年 3～8 月 (上位 80%)	目標値
	最高点	最低点	平均	平均	
態度	4.3	2.7	3.7	3.9	3.0
聴解力	5.0	3.3	4.2	4.3	3.0
関心・意欲	5.0	2.7	3.9	4.1	3.0
目標設定	4.0	2.7	3.5	3.6	3.0
協力・信頼関係	4.0	3.0	3.7	3.8	3.0
役割の認識	5.0	2.7	4.1	4.2	3.0
意見の表現	4.3	2.5	3.3	3.4	3.0
他社への配慮	4.5	3.0	3.6	3.7	3.0
言語能力	4.2	2.9	3.6	3.7	3.0
言語能力	4.3	2.7	3.6	3.7	3.0
メタ言語能力	4.7	2.5	3.6	3.8	3.0
理解力	5.0	3.0	4.1	4.2	3.0
論理性	4.0	2.5	3.3	3.3	3.0
会話スキル	4.3	2.0	3.5	3.7	3.0
課題解決	4.3	2.0	3.7	3.9	3.0
技能習得	4.0	2.0	3.3	3.3	3.0
合計	4.3	2.5	3.7	3.8	3.0

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

表 3-8 は、第 1 期の手話支援者候補の評価結果である。評価は JICA 長期専門家と手話指導者 9 名により行われた。手話支援者候補の得点も個人差が大きい。手話支援者候補の訓練参加状況は、手話指導者の朝夕の定例会議で共有され、問題のある手話支援者候補に対する対応方法が議論されている。

表 3-8 JICA 長期専門家・手話指導者による手話支援者候補の評価

	2013 年 10 月			2013 年 10 月 (上位 80%)	目標値
	最高点	最低点	平均	平均	
社会言語能力	3.76	1.98	2.89	3.02	3.0
ミャンマー言語能力	5.00	1.00	3.17	3.58	3.0
訓練参加状況 (態度、協調性等)	4.40	2.50	3.39	3.47	3.0
社会スキル (コミュニケーションスキル)	4.30	2.50	3.25	3.33	3.0

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

3-4 上位目標

上位目標：DSW により、ろう者の社会参加促進のための手話指導者の手話支援者への指導及び手話支援サービスが継続される	
指標	<ol style="list-style-type: none"> 1. プロジェクト終了後に養成された手話支援者の数 2. 手話支援サービスの利用者数 3. 手話支援者サービス利用者の満足度

上位目標である手話支援サービスの提供は、プロジェクト終了後に開始される予定である。また、上位目標の指標はいずれも協力期間終了後に測定・検証することが可能であるため、上位目標の達成度を現時点で検証することは時期尚早である。

3-5 プロジェクト実施の促進要因・阻害要因

3-5-1 促進要因

(1) 計画内容に関すること

本邦研修を含めて研修が戦略的に実施され、手話指導者の能力向上につながっている。具体的には、手話指導者はまずヤンゴンにて長期専門家より手話教授法、通訳・翻訳理論、手話通訳・翻訳教授法、手話支援者評価について一連の講義を受けたあと、本邦研修に参加した。本邦研修では、手話指導者は日本の手話教授法やろう者支援における経験から、知識・技術を更に深めた。本邦研修を終えヤンゴンに戻った後は、再び長期専門家からの指導のなかで日本での学びを振り返ることで、ミャンマー国内における活用方法を試行した。この間、短期専門家の指導や本邦研修で学びの実践に対するフィードバックも行われた。この流れを繰り返すことにより、人材育成の面で研修の相乗効果を生むこととなった。

なお、指導者訓練は、ろうの指導者と聴者の指導者のそれぞれにきめ細やかなカリキュ

ラムが策定され、実施されている。

(2) 実施プロセスに関すること

手話指導者の能力向上に貢献したもう 1 つの要因は、手話指導者自身の強いコミットメントである。1 年に及ぶ訓練を受けたあと、現在は手話支援者訓練の講師を務めている。これに加え、ろうに関するワークショップや手話教室でも講師を務めており、これらは手話指導者の能力強化の一環としての OJT ともなっている。手話支援者訓練は講義のほか、朝夕の定例会議があり、これらの活動すべてが手話指導者の学びのプロセスとなっている。なお、DSW や NGO に所属せず、収入がない手話指導者も複数いるが、これまで全員が活動を継続している。インタビューによると、手話教授法を学ぶことが動機となって手話指導者の業務が続けられている、とのことであった。

3-5-2 阻害要因

特になし。

第4章 終了時評価の結果

4-1 妥当性

協力期間を通じて本プロジェクトの妥当性は極めて高い。

(1) ミャンマー政府の開発政策との整合性

ミャンマー国憲法（2008年）の第32条において、政府による障害者支援が明記されている。また、現行の国家開発計画（2011年～2015年）には障害者の社会参加を促進するための施策が盛り込まれており、その手段として物理的・社会的・情報のバリアを取り除くこと、職業技術を向上させることが挙げられている。同計画の次期5カ年計画（2015～2019年）には手話支援者の育成計画が含まれる予定となっている。

障害者のための国家アクションプラン（2010～2012年）は、障害者が平等に権利を享受し、国家の社会経済発展に「責任ある市民」として積極的に貢献するために、障害者の移動・アクセス・機会を改善することを目的としている。また、同アクションプランの次期計画（2013～2018年）にも同様に、ろう者を含む障害者の社会参加を促進する活動が盛り込まれる予定である。

(2) ミャンマーのろう者のニーズとの整合性

第一に、障害者に関する全国調査（2010年）によると、国内には120万人（人口の2.32%）の障害者があり、このうち聴覚障害を持つ者は約13.4万人（人口の0.24%）いると推定される。同調査によると、障害者のなかでも社会サービスの存在を認識しているのはごく少数であり、サービスを受けている人々の数はさらに少ない。

第二に、ミャンマーでは地域や家庭ごとにさまざまな手話が用いられてきており、これがろう者同士のコミュニケーションやろう者への支援サービスの提供が限定されてきたことの一因となっている。本プロジェクトの詳細計画策定調査では、教育・保健・法律等の公的サービスを受ける際の手話支援サービスに対して大きなニーズが確認された。

(3) 日本のミャンマーに対する支援方針との整合性

日本政府は、ミャンマーはASEANの繁栄・安定・統合に貢献し得るという観点からも、ミャンマーに対する支援は意義深いとし、ミャンマーの民主化・持続的発展に向けた努力を後押ししている。2011年には、国民が「直接恩恵を受ける基礎生活分野の案件を中心に」支援を実施することが決定された。また、2012年以降の支援重点分野は、①国民の生活向上のための支援、②経済・社会を支える人材の能力向上や制度整備のための支援、③持続的経済成長のための必要なインフラや制度の整備等の支援となっている。本プロジェクトは①と②に合致する。

4-2 有効性

プロジェクト目標は達成されており、これは成果がほぼ達成され、寄与したことによる。よって、本プロジェクトの有効性は高い。

(1) プロジェクト目標の達成度

「3-2 成果の達成度」で述べたとおり、プロジェクト目標は達成されている。

(2) プロジェクト目標達成に対する成果の寄与

「3-3 プロジェクト目標」で述べたとおり、4つの成果のうち、成果1はほぼ達成され、成果2～4は達成された。なかでも成果2～4はプロジェクト目標達成に大きく貢献したといえる。

第一に、手話指導者は高い満足度・理解度を伴って18カ月の訓練を終えた（成果2）。現在は手話支援者訓練の講師を1年以上にわたり務めており（成果3）、これは手話指導者にとっては格好のOJTとなっている。手話支援者研修において参加者の満足度・理解度が高いのは手話指導者の能力向上によるものといえる。また、啓発活動においても手話指導者が講師を務めており（成果4）、これもまた手話指導に関する知識・技術を向上させるよい機会となっている。これらの成果を通じて手話指導者の能力向上が進んだ（プロジェクト目標が達成された）といえる。

他方、プロジェクト終了後の手話支援者訓練と手話支援サービス提供に関する詳細計画はDSWによりまだ策定されていないが（成果1）、手話指導者訓練と第一期生の手話支援者訓練は成功裡に実施された（この計画はむしろ上位目標に必要なものである）。

(3) プロジェクト目標達成に影響した要因

プロジェクト目標達成を促進した大きな要因は、手話指導者訓練が戦略的にデザインされていたことによる。多くの手話指導者自身も実感しているように、ミャンマー国内での訓練、本邦研修、短期専門家による集中訓練が相乗効果を生みつつ、手話指導者の能力向上に貢献した。

4-3 効率性

ミャンマー・日本側双方の投入が質・量・タイミングの面で適切に行われた結果、4つの成果はほぼ計画どおりに達成された。よって、本プロジェクトの効率性は極めて高い。

(1) 成果の達成度

「3-3 プロジェクト目標」で述べたとおり、4つの成果のうち、成果1はほぼ達成され、成果2～4は達成された。

(2) ミャンマー側及び日本側の投入実績

「3-1 投入実績」で述べたとおり、ミャンマー・日本側双方ともに投入は計画どおりに行われた。投入内容・量・タイミングともに適切であった。また、フェーズ1の成果も効果的に活用されている。

(3) 成果達成のための投入の活用

投入が適切に行われた例として、以下のようなものがある。第一に、本プロジェクトのフェーズ1の成果・経験が活用された。具体的には、フェーズ1のタスクフォースのなかでも

指導技術の高かったメンバーが手話指導者として選出され、手話支援者訓練の素地となっている。また、フェーズ1ではヤンゴンとマンダレーを活動場所としていたが、本プロジェクトではヤンゴン1カ所とすることで、頻繁な移動にかかる時間を短縮することにつながった。第二に、本邦研修に参加した手話支援者候補は帰国後に他手話支援者候補と知見を共有した。第三に、手話指導者も手話支援者候補も訓練途中で脱落することなく、現在まで活躍している。彼らのなかには所属先がなく、訓練中の給与または交通費が支払われずにいるが、インタビューによると「学びが動機となり訓練を継続できている」とのことであった。

(4) 成果達成に影響した要因

訓練を受けた手話指導者及び手話支援者が途中で脱落しないことは成果2、3の達成に重要な条件であったが、いずれもこれまで全員がプロジェクトの活動を続けている。「3-5-1 促進要因」で述べたように、無給で業務を続けている手話指導者もいるが、学びが動機づけとなっている。

他方、成果1が部分的な達成にとどまっているのは、第2期の手話支援候補の選出が遅れているためである。多くの組織は職員不足の問題を抱えており、18カ月間の訓練に職員を送ることが難しく、また、短期間で候補者を選定するのも難しいようであった。DSWによると、他省庁・組織により手話支援サービスや手話支援者育成の重要性が認識されていないことがその原因であるということであった。

4-4 インパクト

上位目標はまだ達成される段階ではないが、既に正のインパクトが確認されている。手話支援サービス提供が開始されることで、更なる正のインパクトが見込める。負のインパクトは生じていない。

(1) 上位目標の達成見込み

「3-4 上位目標」で述べたように、個人からの要請に基づいて手話支援コーディネーターが調整を行う手話支援サービスはまだ開始されていない。つまり、上位目標の達成を現時点で検証するのは時期尚早である。

手話支援サービスは2014年8月以降に開始される予定である。これにより、ろう者が保健、教育といった公的サービスへのアクセスが容易になることが想定される。また、雇用機会も拡大することが見込まれる。

(2) 上位目標以外のインパクト

プロジェクト実施により、上位目標以外の正のインパクトが幾つか生み出されている。

第一に、手話指導者及び手話支援者候補がプロジェクト外の組織より要請を受けて、既に複数のイベントや会議で手話支援サービスを提供しており、ろう者への情報提供が行われている(表4-1)。特筆すべきは、2013年12月に行われたASEANパラゲームのニュースが手話付きでテレビ放送されたことである。ミャンマーで初の試みであった。これにより、一般市民にろう者や手話が広く知られるようになっただけでなく、DSWによると、他省庁の高官達も大きな関心を寄せることとなったという。

第二に、手話指導者がエンパワメントされ、手話を自らの言語として自己表現を行うようになったといえる。訓練を受けることにより、他者の前で手話を用いることに恥ずかしさを感じなくなったとインタビューで回答した手話指導者が複数いた。

第三に、プロジェクトの様子が日本のテレビで放送され、また、国会議員や大学生の視察を受けたことにより、ミャンマーにおける日本の支援に対する関心を高めることにつながった。

表 4-1 他組織からの要請に基づく手話指導者・手話支援者候補による手話支援サービス

年	日時	行事・目的	場所	派遣された手話指導者・手話支援者候補数
2013	11月19日	ヤンゴン・アジアパシフィック・クリニックにおける支援	ヤンゴン	1
	11月23日	障害者ワーキンググループの会合	インsein郡区	2
	11月25日	ヤンゴン-ネピドー間車いすレースの式典	バハン郡区	1
	11月30日	障害者ワーキンググループの会合	インsein郡区	2
	12月1～3日	国際障害者デーの式典	ネピドー	2
	12月10日	ろうりソースセンターとハンディキャップ・インターナショナルの会合	バハン郡区	2
	12月16～18日	機構・憲章に関する議論・講義	バハン郡区	6
2014	1月11～22日	第7回 ASEAN パラゲーム	ネピドー	17
	1月26日	ASEAN 機構と障害者の人権に関する研修	ヤンゴン	2

出所：プロジェクト提供資料を基に作成。

4-5 持続性

現在の手話支援者研修が継続され、手話支援サービスが提供されるにはより詳細な実施計画が必要となる。以下を考慮すると、今後 DSW のイニシアティブにより詳細計画が策定されることにより、本プロジェクトの持続性を見込むことができる。

(1) 政策面

国家開発計画（2011～2015年）には障害者の社会参加促進を進めるための施策が含まれており、次期5カ年計画（2015～2019年）には手話支援者訓練が加わる予定である。また、障害者国家活動計画（2013～2018年）にもろう者を含む障害者の社会参加を促進する活動が盛り込まれる予定である。

(2) 制度面

「3-2-1 成果 1」で述べたように、DSW は「手話支援サービス提供のアクションプラン

(2014～2017年)」を策定したが、この計画は計画概要を含むのみで、詳細な活動計画を欠いている。DSWはプロジェクト終了までに、詳細実施計画を策定する予定としている。

手話支援サービスにおけるDSWと他省庁（教育省、保健省、労働省、裁判所等）との連携については、特段の問題はない。これまでも社会福祉セクターではさまざまな協働経験があるとのことである。

手話支援者の訓練施設については、新しく設立されるろう学校に、2014年8月以降移転される予定であるが、現在の施設・機材がそのまま移動されることになっている。

人材に関して若干の懸念事項があったが、解決される見込みである。現在、所属先からの給与支払いのない手話指導者が3名、手話支援コーディネーターとして業務を続けるために所属先が必要な手話支援者候補が3名いる。DSWはこれらの人員のうち希望者を2014年4月以降、職員として雇用すると約束した。また、現在の手話指導者9名はプロジェクト終了後も全員がフルタイムで勤務できる状況になく、手話指導者を増やす必要がある。DSWは手話支援コーディネーターから聴者の手話指導者を選定する予定である。ろうの手話指導者も同様に養成が必要な状況である。

(3) 技術面

「3-2 成果の達成度」で述べたように、手話指導者、手話支援者候補ともに目標としていたレベル以上の知識・技術を習得している。現状を維持するためには、手話支援者及び手話支援者の業務のモニタリングとフィードバックが体系的に行われる必要がある。手話指導者訓練、手話支援者訓練のカリキュラム・教材はプロジェクトの活動として作成されており、今後大きな改訂が必要となる可能性は小さい。手話支援コーディネーター候補については残りのプロジェクト期間でOJTが実施される予定である。

(4) 財政面

国家開発計画の次期5カ年計画（2015～2019年）には手話支援者訓練と手話・ろうに関する啓発活動が加わる予定である。DSWによると、今後5年間はこれらの活動に対して十分な予算が計上されている。また、DSWは手話支援サービス提供に必要な費用を支払うために特別基金を設置する計画があるとのことである。今後の手話支援サービスの詳細実施計画の一部として予算見積も必要になるが、プロジェクト終了までにプロジェクトと会合を持ち、技術支援を受けることになっている。

第5章 提言と教訓

5-1 提言

本調査結果を基に、プロジェクトの更なる効果発現のために以下を提言する。

(1) DSW に対する提言

- 1) 手話支援サービスを効率的・効果的に提供するためには、計画の概要だけでなく、詳細実施計画が必要である。詳細計画には、活動を明確に示すだけでなく、実施時期、責任者、必要経費を含める必要がある。これに関連して、DSW は手話支援サービスのモニタリング計画も作成することが臨まれる。何についての情報をどのように収集し、誰と共有するのか明確にすることが重要である。DSW は詳細実施計画を、プロジェクト終了までに、JICA 専門家及び手話指導者の技術支援を得て作成すべきである。
- 2) 質の高い手話支援サービスを提供するためには、まず各期の手話支援訓練に参加する候補者を適切に選定することが必要である。また、適切な手話支援コーディネーターも、手話支援サービスを円滑に効果的に提供するために求められる。このため、DSW は適切な手話支援者候補を選定すべきである。関連する省庁・組織から質の高い応募者を集めるためには、DSW はろう者に対する手話支援の重要性について十分な情報を提供することが求められる。また、これらの省庁・組織が適切な応募者を選定する時間を十分確保するためには、応募期間を長めに設定する必要がある。
- 3) これまで JCC の場を用いて、DSW、JICA 専門家、手話指導者、その他の協力機関が一堂に会し、手話支援者訓練の実施状況について情報共有・議論を行ってきた。プロジェクト終了後、JCC は解散となるが、DSW は、DSW、手話指導者、手話支援コーディネーターから構成される同様の委員会を設立することが望ましい。この委員会を通して、DSW は手話支援者訓練や手話支援サービスの実施状況・課題を把握すること、手話指導者や手話支援コーディネーターの意見を十分に反映させてろう者の社会福祉政策を更に改善することが可能となる。

(2) プロジェクトに対する提言

- 1) 上記のとおり、プロジェクト終了までに、DSW が手話支援者訓練・手話支援サービス提供のための詳細実施計画を策定することとなっている。この詳細計画が実践的で効果的なものとなるよう、JICA 専門家と手話指導者はこれまでの手話指導者訓練・手話支援者訓練の実施や手話支援サービス提供の現地訓練の実施の経験を DSW と共有することが望まれる。
- 2) これまで現地訓練を含む手話支援者訓練の運営・調整は JICA 専門家が担ってきた。プロジェクト終了後は、手話支援コーディネーターが手話指導者と協力しながら、これらの業務を実施していることになる。そのため、JICA 専門家と手話指導者は必要となる業務を明確にしたうえで、そのノウハウを手話支援コーディネーターに引き継ぐことが求められる。例えば、手話支援コーディネーターの候補者がプロジェクトの執務室で JICA 専門家が行う運営・調整業務を OJT として共に行っていくことが提案される。

(3) JICA に対する提言

プロジェクト終了後、JICA 本部とミャンマー事務所は毎期の手話支援者訓練や手話支援サービスの実施状況・課題についてモニタリングしていくことが必要である。これらに関する情報を上述した委員会から得ることは1つのモニタリング方法となる。モニタリングを通じて、JICA は DSW への更なる支援が必要・適切か確認することができ、プロジェクトの事後評価に必要な情報を得ることができる。

5-2 教訓

本調査結果から得られた教訓は次のとおりである。

(1) 事前の準備・事後の振り返りを組み合わせた効果的な本邦研修の実施

本プロジェクトは本邦研修を含むものであった。研修前の準備と研修後の振り返りを戦略的に組み合わせることで、本邦研修の効果がより高まった。具体的には、手話指導者はまずヤンゴンにて長期専門家より手話教授法、通訳・翻訳理論、手話通訳・翻訳教授法、手話支援者評価について一連の講義を受けたあと、本邦研修に参加した。本邦研修では、手話指導者は日本の手話教授法やろう者支援における経験から、知識・技術を更に深めた。本邦研修を終えヤンゴンに戻ったあとは、再び長期専門家からの指導のなかで日本での学びを振り返ることで、ミャンマー国内における活用方法を試行した。この間、短期専門家の指導も行われた。この流れを繰り返すことにより、人材育成の面で研修の相乗効果を生むこととなった。

(2) プロジェクトの主体としてのろう者の参加

本プロジェクトにおいては、ろうの手話指導者が受益者としてだけでなく「変化をもたらす主体」としての役割を果たした。ろう者は本プロジェクトによって設立される支援サービスの利用者であり、受益者である。ろうの手話指導者がプロジェクトの主体として積極的にかかわることにより2つのインパクトが生じた。第一に、利用者の視点を反映させることで、プロジェクトが生み出すサービス・成果をより使い勝手のよいものにすることができた。第二に、ろうの手話指導者が積極的にプロジェクトにかかわることは、ろう者の社会参加のロール・モデルとなっていることである。これは、ろう者だけでなく、社会一般に対してもろう者の社会参加に関する意識啓発を高めるインパクトとなった。このように当事者がプロジェクトの主体となることで、彼ら自身のエンパワメントにもつながる。

(3) 上位目標の達成のための必要なステップを見越した計画策定

本プロジェクトでは、上位目標（手話支援サービスの提供）の達成に向け、DSW による手話支援サービス提供の計画策定を支援した。プロジェクト目標（手話指導者の筋力強化）を達成することに加え、上位目標を達成するために、必要となる活動をプロジェクト期間中に行うことは、上位目標の達成に向けた基盤を築くことになる。

第6章 団長所感

本プロジェクトは専門家、カウンターパート機関、国内機関、及び在ミャンマー日本大使館やJICA ミャンマー事務所・本部の協力によって、PDMにおいて設定した成果を上げ、プロジェクト目標を達成した。また、プロジェクト終了後の上位目標の達成については、今後最終的に形成されるサービス制度の構築によって、十分に期待できる状況にあることが確認できた。

既存の制度や事業の改善ではなく、ミャンマーで初めてとなる手話に関する全く新しい人材と制度・事業を作り上げるという今回のプロジェクトは、立ち上げにおいて日本側もそうではあるが、ミャンマー側にとっても大変なエネルギーを必要とするものであった。そのような状況のなか、本プロジェクトは、フェーズ1からの過程で築かれた日本とミャンマーの関係者の連携協力、特に長期・短期の専門家とろう者を中心とする手話指導者の協力によって進められ成果を生んだ。その過程では、ろう当事者による力をフェーズ1以上に感じた。このような当事者による推進を築いたのはもちろん関係者すべての努力によるものではあるが、特に長期専門家がその中心的な役割を果たしたことは関係者全員が認めるところである。

今回の調査を通して、急速に発展・民主化するミャンマーにおいて、障害者の社会参加とそのための取り組み、例えば教育におけるろう者への支援や放送における手話ワイドの挿入などといった情報保障に関するニーズと重要性が高まりつつあることが関係機関において認識されていることを実感した。往々にしてアクセシビリティというと身体障害者を念頭に置いた段差の解消などの物理的側面の保障としてのバリア・フリー化が主となるが、本プロジェクトでは、情報保障の側面におけるアクセシビリティの保障を進める好事例として、JICAとしても多くの教訓を得た。

以下、調査団総括として感じた本プロジェクトの意義をまとめる。

1) インクルーシブな社会とそのための合理的配慮の必要性の理解の促進

プロジェクトの目標が達成されたことにより、ミャンマーにおいて障害者に対する情報保障が一步進んだことになる。それは単に取り組みが1つ増えたということではなく、障害分野の取り組みが、障害者個人の機能回復を優先し社会参加の前提条件とするような取り組みから、アクセシビリティの保障と合理的配慮の提供による社会参加の保障をめざすインクルーシブな社会の形成という取り組みへと転換していることを示している。

本プロジェクトは、単にろう者に対する具体的な支援の形成という結果だけではなく、障害（者）問題への関心を高めるきっかけにもなっている。特に障害者に対する支援において、医療リハビリテーションなどだけではなく、情報保障といった合理的配慮が必要であることが理解されるきっかけになったと感じている。これは同じく情報保障が課題である視覚障害者や知的障害者にとっても意味のあるものである。

2) プロジェクト期間中の成果とその後の成果

本プロジェクトの主たる成果は手話指導者と手話支援者、そしてその育成とサービス提供制度である。人的資源の形成については、プロジェクト期間中の成果が人数の面からは少ない印象を受ける場合もあるが、育成のための指導的人材と育成制度ができたことによる今後の人材の輩出、そして、支援サービスのための提供制度ができたことによって裨益するろう者の数は

多い。また、今まで全くなかった手話支援サービスという障害分野における合理的配慮の1つの核となるサービスができたことは、教育や就労等さまざまな生活場面での参加が制限されてきたろう者にとっては大きな一歩である。

3) 手話という言語文化の形成によるエンパワメント

第1フェーズにおいても感じたことであるが、本プロジェクトは、ろう者のエンパワメントに貢献するものでもあった。このエンパワメントとは、単なる技術の習得や意思決定という意味でのエンパワメントではなく、社会変革の行動主体（エージェント）になるという意味でのエンパワメントである。例えば、金銭的な見返りが限られているにもかかわらず、指導者として自身の技術の研鑽に努め、より良い支援者を育成することによってインクルーシブな社会を形成しようと考え行動している指導者たちの姿はその証拠である。これら指導者となっているろう者が他のろう者のロール・モデルとなり、このエンパワメントは更に広がっていくだろう。

社会を変えるために自分たちの意見を表出していくための手話という言語を確立し、それを使って社会をよりインクルーシブな社会へと変えていく過程が、今まで社会的に不利な状況に置かれてきた自分たちの解放のプロセス、つまり、エンパワメントとなっている。

4) JICA における障害分野の情報保障の取り組み事例として

JICA における従来の障害分野の取り組みではいわゆる医療リハビリテーションや職業リハビリテーションなどによる障害者個人の機能的な回復や向上を目的とする取り組みが主流であった。近年の新しい取り組みとしてはエンパワメントを念頭に置いたリーダー育成の取り組みも増加しつつある。しかし、障害者の社会参加そのものを直接推進するための“インクルーシブな社会”を実現するためのアクセシビリティの保障を中心に据えた取り組みは、フィリピンのプロジェクトなどと、まだまだ限られている。そのなかで、今回の手話に関するプロジェクトは、障害分野におけるインクルーシブな社会を形成する取り組みの具体例を提供している。

現地側に既存の事業や人材、経験が蓄積されていない分野の人材育成と制度構築は、それらを実際に運用しながらより適切なものに変更していくような息の長い形態の協力が本来は望ましい。今回は計6年間での協力であり、人材育成と事業についてはある程度の持続的な発展を確保することはできていると感ずる。しかし、これから本格的に制度を運営していく過程において、既に多くの知見を得ている日本からの適切な助言や協力が行えれば、その発展は更に加速するものと思える。そのような視点をもって今後の発展を見守りたい。

付 属 資 料

1. 面談者リスト
2. PDM改訂の内容
3. 協議議事録 (Minutes of Meeting : M/M)

1. 面談者リスト

1. 面談者リスト

組織	氏名	役職
DSW	U Saw Win	Director General of Rehabilitation Section
	U Aung Tun Khaing	Deputy Director General of Rehabilitation Section
	Daw Yu Yu Swe	Deputy Director of Rehabilitation Section
	U Saw Win	Director of Rehabilitation Section
	U Swan Yi Ya	Assistant Director of Rehabilitation Section
	Daw Khin San Yee	Assistant Director of Rehabilitation Section
Ministry of Education	U Win Myint Maung,	Deputy Director General, DEPT
	U Ko Lay Win	Deputy Director (Planning), MOE
	Daw Mu Mu Aung	Deputy Director (Computer/Statistics), DEPT
	Daw Khin Lhin Gyi	Deputy Director (Finance Section), DEPT
MRTV	U Myo Myint Aung	Director (TV)
	U Zeyea	Director (Radio)
Deaf Resource Center	U Kyaw Kyaw	Founder/Program Director
Mary Chapman School for the Deaf	Daw Nyunt Nyunt Thein	Principal
Sign Language Trainer	U Kyaw Yu	President, Yangon Deaf Association
	Daw Thida Swe	Social Worker -2, Social Rehabilitation Centre (Mandalay), DSW
	Daw Mai Nwe Ni	Teacher, Mary Chapman School for the Deaf
	Daw Yadana Aung	Vice Principal, Mandalay School for the Deaf, DSW
	U Kyaw Zin Win	Assistant Teacher, Mandalay School for the Deaf, DSW
	U Aye Soe	Consultant, Mandalay Deaf Youth Development Centre
	U Tin Aye Ko	Facilitator, Myanmar Deaf Community Development Association
	Naw Shay Myar	Volunteer, Mary Chapman School for the Deaf
	U Aung Kyaw Thet	Teacher, Mary Chapman School for the Deaf
Sign Language Supporter candidate	Daw Yu Par Aye	Shwe Phi Tar Youth Nursery Department, Pyay, Wet Htee Kan
	Daw Tin Mar Swe	School for Disabled Children, Yangon, DSW
	Daw Than Than Soe	MRTV, Ministry of Information

	U Hein Wanna Kyaw	Shwe Min Thar Foundation
	Daw Naw Sae Sae Eae	TLMI
在ミャンマー 日本大使館	松尾秀明	参事官
	有馬純枝	二等書記官
JICA	田中雅彦	所長
	中谷香	企画調査員
(プロジェクト)	小川美都子	JICA 専門家 (ろう者支援/業務調整)
	Daw Thet Su Kyi	プロジェクトスタッフ
	Daw Nan Mon Sabai Khin	プロジェクトスタッフ

2. PDM 改訂の内容

2. PDM改訂の内容

	目標・成果	指標 (PDM ver.0) (旧)	指標 (PDM ver.1) (新)
プロジェクト目標	Capacity of Sign Language Trainers to train Sign Language Supporters is improved by DSW.	1. Level of teaching ability of Sign Language Trainers.	1. Level of teaching ability of Sign Language Trainers (80 % of participants who complete the training reach the minimum level to work as a Sign Language Trainers)
		2. Level of Sign Language ability of Sign Language Supporters	2. Level of sign language ability of Sign Language Supporters (80 % of participants who complete the course reach the minimum level to work as a Sign Language Supporters)
成果1	System to train Sign Language Supporters and provide sign language support service is established by DSW.	1-1. Number of selected Sign Language Support candidates	1-1. More than 40 Sign Language Supporter candidates are selected by DSW.
		1-2. Plan of Sign Language Supporter training and provision of sign language support service	(no change)
成果2	Training of Sign Language Trainers is implemented.	2-1. Number of trained Sign Language Trainers	2-1. More than 8 Sign Language Trainers are trained.
		2-2. Level of satisfaction of participants	2-2. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 4 out of 5.
		2-3. Level of understanding of participants	2-3. The understanding level of the training participants is rated higher than 4 out of 5.
成果3	Training of Sign Language Supporters is implemented by Sign Language Trainers.	3-1. Number of trained Sign Language Supporters	3-1. 70 % of the Sign Language Supporters candidates complete the training.
		3-2. Level of satisfaction of participants	3-2. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 3.5 out of 5.
		3-3. Level of understanding of participants	3-3. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 3.5 out of 5
成果4	Awareness raising activities on the Deaf and sign language are implemented.	4-1. Number of implemented activities.	4-1. More than 12 workshops and 50 sessions of sign language class are implemented.
		4-2. Number of participants	4-2. More than 1000 persons participate in the awareness raising activities.
		4-3. Level of satisfaction of participants	4-3. The satisfaction level of the participants is rated higher than 3.5 out of 5.
		4-4. Level of understanding of participants	4-4. The level of understanding on the Deaf and sign language of the participants is rated higher than 3.5 out of 5.

**MINUTES OF MEETING
BETWEEN
THE JAPANESE TERMINAL EVALUATION TEAM
AND
THE DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE,
MINISTRY OF SOCIAL WELFARE, RELIEF AND RESETTLEMENT
OF THE REPUBLIC OF THE UNION OF MYANMAR
ON
THE JAPANESE TECHNICAL COOPERATION PROJECT FOR
SUPPORTING SOCIAL WELFARE ADMINISTRATION
- PROMOTION OF SOCIAL PARTICIPATION OF THE DEAF COMMUNITY - PHASE II**

The Japanese Terminal Evaluation Team (hereinafter referred to as "the Japanese Team") organized by the Japan International Cooperation Agency (hereinafter referred to as "JICA") and headed by Dr. Kenji Kuno, visited the Republic of the Union of Myanmar (hereinafter referred to as "Myanmar") from 12th February to 26th February 2014.

During its stay in Myanmar, the Japanese Team had a series of discussions with the Department of Social Welfare (hereinafter referred to as "DSW"), the Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement of the Republic of the Union of Myanmar, jointly reviewed the achievement of the Project for Supporting Social Welfare Administration - Promotion of Social Participation of the Deaf Community - Phase II (hereinafter referred to as "the Project") and exchanged views on the project activities to fulfill the Record of Discussions (hereinafter referred to as "R/D") signed on 25th March 2011.

As a result of the discussions, the Japanese Team and DSW agreed the matters referred in the document attached hereto.

Nay Pyi Taw, 25th February 2014



U Soe Kyi
Director General
Department of Social Welfare
Ministry of Social Welfare, Relief and Resettlement
Republic of the Union of Myanmar



Dr. Kenji Kuno
Leader
Japanese Terminal Evaluation Team
Japan International Cooperation Agency

1. Introduction

1-1. Background

DSW has provided various social welfare services to children, youth, women, elderly persons and persons with disabilities. However, it is not able to meet the needs of each group due to the lack of capacity to provide specialized services. In particular, the service to persons with disabilities remain behind, and the capacity building of social welfare administrators is strongly requested.

The Project for Supporting Social Welfare Administration: Promotion of Social Participation of the Deaf Community was implemented from December 2007 to December 2010. In that project, various results were achieved in dissemination of Myanmar Sign Language. However, various challenges still remained to promote social participation of the Deaf community. The dissemination activities on the Deaf and Myanmar Sign Language were implemented, but capacity building was still needed to support the communication between the Deaf and hearing people, which was one of the obstacles for the social participation of the Deaf.

Under the above-mentioned circumstances, the Myanmar government requested continuous support from the Japanese government to train the sign language trainers (hereinafter referred to as SLT) for further dissemination of sign language and training of sign language supporters (hereinafter referred to as SLS). The Project was launched in August 2011. JICA dispatched the Mid-term Review team in February 2013. As the Project will be completed in August 2014, the Terminal Evaluation has been conducted.

1-2. Objectives of the Review

The objectives of the Terminal Evaluation are as follows:

- (1) To grasp the inputs of the Myanmar and Japanese sides to the Project and summarize the achievements of the Project activities;
- (2) To conduct a comprehensive evaluation of the Project from the viewpoints of five evaluation criteria (explained later in this document); and
- (3) To make recommendations for the Project and to draw lessons learnt which can be applicable for other similar projects.

Handwritten mark

Handwritten mark

1-3. Schedule of the Japanese Team

		Dr. Kuno	Ms. Motoike	Ms. Suzuki
Feb 12	Wed			- Arrival at Yangon - Interview with JICA Expert
13	Thu			- Interview with JICA Expert and SLT - Observation of the training for SLS
14	Fri			- Interview with SLS and NGO
15	Sat			- Report preparation
16	Sun			- Report preparation - Move to Nay Pyi Taw
17	Mon			- Interview with MRTV
18	Tue	- Arrival at Yangon		- Interview with DSW
19	Wed	- Meeting at the Japanese Embassy and JICA Myanmar Office - Interview with JICA Expert and NGO - Move to Nay Pyi Taw		- Interview with DSW
20	Thu	- Discussion with DSW		
21	Fri	- Discussion with DSW		
22	Sat	- Preparation of the draft of M/M		
23	Sun	- Preparation of the draft of M/M		
24	Mon	- Interview with MOE		
25	Tue	- Participation in the 5 th JCC - Sign of M/M		
26	Wed	- Move to Yangon - Report to the Japanese Embassy and JICA Myanmar		

* DSW: Department of Social Welfare, SLT: Sign Language Trainer, SLS: Sign Language Supporter (candidate), MRTV: Myanmar Radio and Television, M/M: Minutes of the Meeting, MOE: Ministry of Education, JCC: Joint Coordinating Committee

1-4. Members of the Japanese Team

	Name	Job Title	Occupation	Period
1	Dr. KUNO Kenji	Leader	Senior Advisor on Social Security, JICA	18-26 Feb
3	Ms. MOTOIKE Ai	Cooperation Planning	Social Security Division, Human Development Department, JICA	18-26 Feb
4	Ms. SUZUKI Junko	Evaluation Analysis	Senior Researcher, Foundation for Advance Studies on International Development	12-26 Feb

Kenji

K

1-5. Methodology of the Review

In accordance with the JICA Project Evaluation Guideline, the Terminal Evaluation of the Project was conducted. The definition of the five evaluation criteria is given below.

- Relevance: Relevance of the Project is reviewed by the validity of Project Purpose and Overall Goal in connection with the Government development policy and the needs of the target group and/or ultimate beneficiaries in Myanmar.
- Effectiveness: Effectiveness is assessed to what extent the Project has achieved its Project Purpose, clarifying the relationship between Project Purpose and Outputs.
- Efficiency: Efficiency of the Project implementation is analyzed with emphasis on the relationship between Outputs and Inputs in terms of timing, quality and quantity.
- Impact: Impact of the Project is assessed in terms of positive/negative, and intended/unintended influence caused by the Project.
- Sustainability: Sustainability of the Project is assessed in terms of institutional, financial and technical aspects by examining the extent to which the achievement of the Project will be sustained after the Project is completed.

The framework for the evaluation survey is shown in the Evaluation Grid (Annex 1). Necessary data and information were collected with the following methods.

- Literature/Documents Review (progress reports of the Project, reports of JICA short-term experts, other relevant documents, etc.);
- Questionnaires (DSW, JICA expert, SLT, SLS, organizations off/for persons with disabilities, etc.);
- Interviews (DSW, MRTV, Ministry of Education, JICA expert, SLT, SLS, etc.); and
- Observation of the training facilities, developed materials and syllabus, etc.

2. Achievement of the Project

The Project achievement and current status verified by the set indicators in the Project Design Matrix (hereinafter referred to as "PDM") are shown in the following. The current PDM was revised after the mid-term review, which is shown as Annex 2.

2-1. Inputs

2-1-1. Inputs by Myanmar Side

(1) Counterpart Personnel

The Project Director and Project Manager as well as five (5) other personnel were

assigned as planned, as shown in Annex 3.

(2) Provision of Facilities

The office space for the Project and three (3) rooms for the training have been provided by DSW. The cost for electricity and water for the Project office has been borne, and accommodation for SLT and SLS candidates has been provided by DSW.

2-1-2. Inputs by the Japanese Side

(1) Dispatch of Experts

One (1) long-term expert and nine (9) short-term experts have been dispatched, as shown in Annex 4.

(2) Training in Japan

A total of 53 personnel have participated in the trainings in Japan, as shown in Annex 4.

(3) Provision of Local Cost

Part of the operational cost of the Project has been borne by the Japanese side, as shown in Annex 4.

2-2. Outputs

2-2-1. Output 1

Output 1	System to train Sign Language Supporters and provide sign language support service is established by DSW.
Indicators	1-1. More than 40 SLS candidates are selected by DSW. 1-2. Plan of SLS training and provision of sign language support service.
Achievement	1-1. Twenty-four (24) SLS candidates have been selected by DSW for the first batch of the training. Twenty (20) candidates for the second batch are to be selected by the end of March 2014. 1-2. "Future Action Plan for Sign Language Support Services (2014-2017)" was prepared by DSW. The Plan aims at training of 100 SLS in five (5) years and providing sign language support services in five (5) regions in 10 years, by implementing three (3) major activities—(i) training of SLT, (ii) training of SLS, and (iii) sign language support services.

In both of the above indicators, the target has been met partly; The Output 1 has been partly achieved.

For the second batch training, selection of SLS candidates is behind the due date. It is expected that 20 will be decided by the end of March 2014 so that the training can start after April.

"Future Action Plan for Sign Language Support Services (2014-2017)" was prepared by

DSW, as shown in the Table 1 (extract of the Visions and Goals) and Annex 5, based on the draft of the “Long-term Plan for Provision of the Sign Language Support Service,” which had been prepared during the Study Tour in Japan in June 2013. This was presented at the fourth Joint Coordination Committee held in 8 October 2013. The Future Action Plan contains vision, goals, and steps for achieving the goals, and a detailed operational plan is being developed by DSW.

Table 1: “Future Action Plan for Sign Language Support Services (2014-2017)”

Vision in 10 years	<ol style="list-style-type: none"> 1. Sign language support services are provided in five (5) regions (Yangon, Mandalay, Bago, Ayeyarwaddy, and Shan), so that the Deaf people can appreciate health, education, legal, and employment services more. 2. The national qualification system for SLS, SLT, and sign language interpreters is established.
Goals in 5 years <Human Resource Development>	<ol style="list-style-type: none"> 1. At least 20 SLT (4-6 hearing and 14-16 Deaf) provide training for SLS in Yangon. 2. At least 100 SLS provide support services in five (5) regions.
<Provision of Sign Language Support Service>	<ol style="list-style-type: none"> 1. The service provision model is set up in Yangon and Mandalay. 2. The service is scaled up in Bago, Ayeyarwaddy, and Shan.
<Promotion of Deaf Culture and Sign Language>	<ol style="list-style-type: none"> 1. SLS of the first batch conducts Deaf and sign language workshops in Yangon, Mandalay, Bago, Ayeyarwaddy, Taunggyi, and Nay Pyi Taw.

To ensure the feasibility of the Plan, the Project has made following efforts.

- Terms of reference for the sign language support service coordinators were clarified: (i) coordination for SLS dispatch, (ii) support for the SLS training, (iii) office work such as document preparation and accounting, and (iv) management of sign language classes for the public. This was shared in the fourth Joint Coordination Committee in October 2013. Six (6) support service coordinators are to be appointed, which have not been officially finalized.
- The draft of the leaflet for application of the support services has been in preparation in Myanmar and English. The Deaf people and their family can obtain information on (i) how to apply for the service, (ii) examples of support service, and (iii) procedure of receiving the services.
- Various forms regarding the support services have been prepared, such as (i) application form, (ii) notification form for the applicant, (iii) notification form for the supporter, (iv) reporting form to DSW, (v) self-evaluation sheet of the supporter, (vi) evaluation sheet filled by SLT, etc.

Handwritten mark

Handwritten mark

2-2-2. Output 2

Output 2	Training of Sign Language Trainers is implemented.
Indicators	2-1. More than 8 SLT are trained. 2-2. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 4 out of 5. 2-3. The understanding level of the training participants is rated higher than 4 out of 5
Achievement	2-1. Nine SLT have been trained and they are now training SLS in the first batch training. 2-2. The satisfaction level of the training participants (SLT) is rated 4.1 out of 5. 2-3. The understanding level of the training participants (SLT) is rated 4.1 out of 5.

So far, the training of SLT has been conducted as scheduled, and their satisfaction and understanding were more than the targeted. Therefore, the Output 2 has been achieved.

The training of SLT has consisted of (i) sign language teaching method, (ii) theories on translation/interpretation, (iii) teaching method for sign language translator/interpreter, and (iv) evaluation of SLS. The detailed contents of the training are shown in Annex 6.

SLT themselves realize that they have acquired knowledge and skills on sign language and teaching skills. They commented in the evaluation survey that they came to conduct self-reflection in their teaching for improvement and have deepened understanding towards the Deaf and the sign language as a language. Also, the JICA experts recognized SLT's improvement in theory and techniques as they can train SLS in a more concrete and encouraging way than before.

The Table 2 shows SLT's self-evaluation, which is another good indicator for effective implementation of the training of SLT.

Table 2: Self-evaluation of SLT on their understanding

	Yes	No	Total
Did you understand the training easily?	9	0	9
Have you got knowledge and skills through the training?	9	0	9
Are you confident to work as SLT?	6 (fully) 3 (partially)	0	9

2012

76

2-2-3. Output 3

Output 3	Training of Sign Language Supporters is implemented by Sign Language Trainers.
Indicators	<p>3-1. 70 % of the SLS candidates complete the training.</p> <p>3-2. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p> <p>3-3. The understanding level of the training participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p>
Achievement	<p>3-1. As of February 2014, all of the 24 candidates (100%) continue learning in the training.</p> <p>3-2. The satisfaction level of the training participants (SLS) is rated 4.1 out of 5.</p> <p>3-3. The understanding level of the training participants (SLS) is rated 3.9 out of 5.</p>

So far, the training of SLS of the first batch has been conducted as scheduled, and their satisfaction and understanding reached an expected level. The Output 3 has been achieved.

The detailed results of satisfaction and understanding of SLS candidates are shown in the Table 3 and Table 4. In terms of both satisfaction and understanding, the scores have been more than the target figures. As a whole, the evaluation score is a little higher in sign language training than translation/interpretation.

Table 3: Satisfaction level of SLS towards the training given by SLT

	2013 Feb	2013 Mar	2013 April-May	2013 June-July	2013 Aug-Sep	2013 Oct-Nov	Whole Period	Target score
Training of sign language	4.0	4.2	4.2	4.0	4.1	4.2	4.2	3.5
Training of translation and interpretation	3.8	4.3	4.3	4.0	4.0	4.0	4.1	3.5
Training as a whole	3.8	4.0	4.2	3.8	3.9	4.1	4.1	3.5

Table 4: Understanding level of SLS in the training given by SLT

	2013 Feb	2013 Mar	2013 April-May	2013 June-July	2013 Aug-Sep	2013 Oct-Nov	Whole Period	Target score
Training of sign language training	3.9	4.0	4.0	3.9	3.9	4.0	4.0	3.5
Training of translation and interpretation	4.0	4.2	4.2	3.9	4.0	4.0	4.0	3.5
Training as a whole	3.7	4.0	3.8	3.8	4.3	3.9	3.9	3.5

Handwritten mark

Handwritten mark

Interviewed SLT answered that the SLS candidates have been acquiring new knowledge and skills on the sign language. However, the understanding level of SLS candidates varies much, as shown in the Table 7. For example, in terms of the Myanmar linguistic skill, the highest score was 5.0 while the lowest was 1.0 out of 5.

2-2-4. Output 4

Output 4	Awareness raising activities on the Deaf and sign language are implemented.
Indicators	<p>4-1. More than 12 workshops and 50 sessions of sign language class are implemented.</p> <p>4-2. More than 1,000 persons participate in the awareness raising activities.</p> <p>4-3. The satisfaction level of the participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p> <p>4-4. The level of understanding on the Deaf and sign language of the participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p>
Achievement	<p>4-1. As of February 2014, eight (8) Deaf workshops, five (5) sign language workshops and 88 sessions (during 38 sign language classes) were conducted.</p> <p>4-2. In total, 691 persons participated in the workshops and 785 persons participated in the sign language classes.</p> <p>4-3. The satisfaction level of the participants in the workshops and sign languages classes is rated 4.0 and 3.4, respectively, out of 5.</p> <p>4-4. The level of understanding on the workshops and sign language classes is rated 3.8 and 3.6, respectively, out of 5.</p>

Awareness raising activities have been organized as scheduled, and the level of satisfaction and understanding of the participants is higher than expected, except only one indicator which gap is very small. It can be said that the Output 4 has been achieved.

The workshops and sign language classes were held not only in Yangon and Mandalay, but also in Monywa, Lashio and Hpa An, as shown in the Table 5. Most of the awareness raising activities have been held in Mandalay and Yangon. Some of the ex-taskforce members of the Project Phase I participated as resource persons in the activities in Mandalay, in collaboration with SLT of the Project.

It should be noted that SLT functioned as facilitators and lecturers for these workshops and classes.

Handwritten signature

Handwritten mark

Table 5: Deaf/Sign language workshops and sessions and participants

	Place	Workshops/sessions	Participants
Deaf workshops	Mandalay	5	317
	Yangon	3	170
Sign language workshops	Mandalay	1	34
	Yangon	1	61
	Monywa	1	31
	Lashio	1	38
	Hpa An	1	40
Total		13	691
Sign language classes	Yangon	41	331
	Mandalay	36	345
	Monywa	3	31
	Lashio	6	38
	Hpa An	2	40
Total		88	785

Besides the above workshops and sessions organized by the Project, DSW has conducted three (3) sign language workshops within DSW's own budget, in Mandalay, Yangon, and Sagaing in 2013. SLT and SLS were sent to these workshops as facilitators.

2-3. Project Purpose

Project purpose	Capacity of Sign Language Trainers to train Sign Language Supporters is improved by DSW.
Indicators	<ol style="list-style-type: none"> 1. Level of teaching ability of SLT (80 % of participants who complete the training reach the minimum level to work as a Sign Language Trainers). 2. Level of Sign Language ability of SLS (80 % of participants who complete the course reach the minimum level to work as a Sign Language Supporters).
Achievement	<ol style="list-style-type: none"> 1. The attitude and language ability of SLT were scored 3.7 and 3.6 out of 5, respectively. The score of the upper 80% of SLT (7 SLT) is, respectively, 3.9 and 3.7. 2. The social language skill, Myanmar linguistic skill, manner in the training and social skill of SLS candidates were scored 2.9, 3.2, 3.4 and 3.2, respectively. The score of the upper 80% of SLT candidates (19 SLS candidates) is, respectively, 3.0, 3.6, 3.5 and 3.3.

The evaluation criteria for SLT's teaching ability were selected by the short-term experts, and the criteria for SLS's sign language ability were developed by the long-term expert and SLT. Both the "minimum level to work as SLT" and "minimum level to work as SLS" in the above indicators are defined 3.0 by the Project.

The scores of the upper 80% of SLT and SLS surpass the target. Also, by considering that the understanding and satisfaction level of SLS candidates is more than what the Project

Handwritten signature

Handwritten mark

has expected, as shown in the Table 6 and Table 7, it can be said that both SLT and SLS candidates have reached the desirable level to work as SLT and SLS. Therefore, the Project Purpose has been achieved.

Three (3) experts have evaluated the performance of SLT and the average of the three (3) evaluations is shown in the Table 7. The average of the scores in attitude and language ability is 3.7 and 3.6, respectively, surpassing the target score. Especially, the points in "listening with attention," "recognition of roles" and "understanding ability" are scored higher than others. When limiting the upper 80% of SLT, the score is 3.9 and 3.7, respectively.

The scores vary much among SLT. For those whose scores are low, extra training is given in the evening or on the weekend.

Table 6: Evaluation of SLT made by the JICA short-term experts

	2013 March-August			2013 Mar-Aug (Upper 80%)	Target score
	Max	Min	Ave	Average	
Attitude	4.3	2.7	3.7	3.9	3.0
Listening with attention	5.0	3.3	4.2	4.3	3.0
Interest and eagerness	5.0	2.7	3.9	4.1	3.0
Goal setting	4.0	2.7	3.5	3.6	3.0
Cooperation/rapproach	4.0	3.0	3.7	3.8	3.0
Recognition of roles	5.0	2.7	4.1	4.2	3.0
Expression of opinions	4.3	2.5	3.3	3.4	3.0
Consideration of others	4.5	3.0	3.6	3.7	3.0
Language Ability	4.2	2.9	3.6	3.7	3.0
Language ability	4.3	2.7	3.6	3.7	3.0
Meta language ability	4.7	2.5	3.6	3.8	3.0
Understanding ability	5.0	3.0	4.1	4.2	3.0
Logicity	4.0	2.5	3.3	3.3	3.0
Conversation skills	4.3	2.0	3.5	3.7	3.0
Problem-solving	4.3	2.0	3.7	3.9	3.0
Skills acquisition	4.0	2.0	3.3	3.3	3.0
Total	4.3	2.5	3.7	3.8	3.0

The following is the evaluation result of SLS candidates of the first batch, made by SLT and the JICA long-term expert. The score varies much among 24 SLS candidates. SLS candidates' performance is shared during the daily SLT meetings. When issues are raised, SLT discuss the solutions.

Handwritten mark

Handwritten mark

Table 7: Evaluation of SLS candidates made by SLT and the JICA long-term expert

	2013 October			2013 Oct (Upper 80%)	Target score
	Max	Min	Ave	Ave	
Social language skill	3.76	1.98	2.89	3.02	3.0
Myanmar linguistic skill	5.00	1.00	3.17	3.58	3.0
Manner in the training (attendance, supportiveness, etc.)	4.40	2.50	3.39	3.47	3.0
Social skill (communication skills)	4.30	2.50	3.25	3.33	3.0

2-4. Overall Goal

Overall Goal	DSW sustains training to Sign Language Supporters and sign language supporting services for promoting social participation of the Deaf.
Indicator	<ol style="list-style-type: none"> 1. Number of trained SLS after completion of the Project. 2. Number of service users. 3. Level of satisfaction of service users.
Achievement	<ol style="list-style-type: none"> 1. The data is not available, as there are six (6) months left for SLS to complete the training. 2. The data is not available, as the support services have not started yet. 3. The data is not available, as the support services have not started yet.

As the training of SLS has not been completed yet and therefore the sign language support services have not started yet, the achievement level of the Overall Goal cannot be verified.

2-5. Promoting and Hindering Factors for Project Implementation

2-5-1. Promoting Factors

The following are the major factors which have promoted the smooth and effective implementation of the Project.

(1) Strategic Design of Training of SLT

Training has been conducted in a strategic way, which has contributed to strengthening knowledge and skills of SLT. First, ST received a series of lectures as shown in Annex 6 in Yangon from the JICA long-term expert, and then they participated in the training course in Japan to deepen their knowledge and skills from Japanese experiences in teaching the sign language and supporting the Deaf. After they returned to Yangon, they tried applying what they had learnt in Japan by adjusting it in the Myanmar context. Also, training was given by short-term experts so that SLT got technical feedback on their teaching performance. Thus, the combination of training in Yangon and Japan has created synergetic effects on SLT's learning.

(2) SLT's Strong Commitment

Another factor which has pushed SLT's learning is their own strong commitment. First, they received training for one year and now give training to SLS. They never stop learning through daily preparation in the morning and reporting meeting in the afternoon.

Second, for those who do not belong to DSW or NGOs, salary is not paid by the Project, and for those who commute to the training center, travel expenses are not paid. However, they continue working as SLT. Some SLT commented that gaining new knowledge and skills motivates themselves even in the financially difficult situation.

2-5-2. Hindering Factors

There have not been very severe concerns or hindering factors for the Project implementation.

3. Evaluation by Five Criteria

3-1. Relevance

As explained below, the Project has been relevant with Myanmar government's policy on social welfare, needs of the Deaf community, as well as Japan's Official Development Assistance (hereinafter referred as "ODA") policy; therefore the Project relevance is very high.

3-1-1. Consistency with the Development Policy of the Government of Myanmar

The Constitution of Myanmar of 2008 stipulates in the Section 32 that the State shall care for vulnerable people including persons with disabilities. Furthermore, the current National Development Plan includes programs to promote social participation of persons with disabilities through removing physical, social and informational barriers and improving vocational skills. The next five-year plan (2015-2019) includes five-year training of SLS.

The National Plan of Action for Persons with Disabilities 2010-2012 showed a nationwide focus on persons with disabilities, aiming to increase mobility, accessibility and opportunities for persons with disabilities in order to render them able to enjoy equal rights and to actively contribute to the economic and social development of the state as "responsible citizens". Also, its subsequent National Plan of Action for Persons with Disabilities 2013-2018 will contain actions to be taken to promote social participation of persons with disabilities including the Deaf people.

3-1-2. Relevance to the Needs of the Rehabilitation Sector in Myanmar

Myanmar National Disability Survey (2010) indicated that Myanmar has a disability prevalence of 2.32%, translating to approximately 1.2 million persons living with disabilities. The prevalence of hearing disabilities was 0.24%, which indicates 134,750 persons have hearing difficulties. The survey revealed "only a small minority of persons with disabilities are

J. 12

2

aware of the existence of social services” and even fewer have ever had contact with agencies offering services.

In Myanmar, various sign languages exist by region and community, which has hindered communication among the Deaf people and also effective support provision for the Deaf. According to the Preliminary Study for the Project, there was a great need for sign language support for receiving public services related to education, health, law, etc.

3-1-3. Relevance to Japanese ODA Policies

The Japanese government considers that assistance for Myanmar is very significant, as Myanmar could contribute to ASEAN's development, stability and integration. Therefore Japan supports Myanmar's efforts for democratization and sustainable development. In June 2011, the Japanese government decided to provide its assistance so that people should be benefited directly. And, in April 2012 the following three were selected as priority areas of assistance: (i) assistance improvement of people's livelihoods, (ii) assistance for capacity building and institutional development to sustain the economy and society, and (iii) assistance for infrastructure and institutional development for sustainable economic development.

3-2. Effectiveness

The Project Purpose has been achieved, which has been realized mostly by the Outputs produced. Therefore, the Project effectiveness is high.

3-2-1. Achievement of the Project Purpose

As explained in 2-3, the Project Purpose has been achieved. In other words, capacity of SLT to train SLS has been strengthened as planned.

3-2-2. Contribution of the Project Outputs to achievement of the Project Purpose

As explained in 2-2, the Project Outputs have been produced as targeted, except the Output 1, and these three (3) Outputs have definitely contributed to the achievement of the Project Purpose.

First, SLT have gone through 18-month training with successful level of understanding and satisfaction. They have worked as trainers for SLS candidates for more than one year, which is continuous on-the-job training for them. High degree of understanding and satisfaction and understanding of SLS candidates imply good performance of SLT as trainers. Also, lectures in the awareness raising activities have been good opportunities for SLT for improving their knowledge and skills in sign language teaching. These are the factors for the achievement of the Project Purpose.

On the other hand, the concrete and detailed plan has not yet been officially approved by DSW for provision of sign language support services and for training of SLS. However, the training of SLT and SLS of the first batch has been implemented successfully even without this plan.

Handwritten signature

Handwritten mark

3-2-3. Other factors which have influenced achievement of the Project Purpose

It should be noted that the achievement of the Project Purpose has been realized through strategic implementation of the training of SLT. Many interviewed SLT commented that the combination of daily training by the long-term expert, study visit to Japan and training by the short-term experts worked very well.

There were no other external factors which influenced the achievement of the Project Purpose.

3-3. Efficiency

Most of the Project Outputs have been produced as expected with appropriate use of inputs. Considering the following points, overall, the Project efficiency is very high.

3-3-1. Production of the Project Outputs

So far, three of the Project Outputs have been produced as expected, except that the Output 1 has been partly achieved.

3-3-2. Inputs by the Myanmar and Japanese Side

The human, material and financial resources have been allocated as planned by the Myanmar and Japanese sides in terms of quantity, quality and timing.

3-3-3. Conversion of the Project Inputs to the Outputs

The Inputs have been utilized in line with the Project objectives. The following is some examples.

- SLT were selected from those who had better teaching skills among the task force members of the previous phase of the Project. Their experience in making the Myanmar Sign Language conversation book and teaching the sign language has been fundamental for capacity building of SLT themselves.
- Based on the lessons from the previous phase, the training has been conducted only in Yangon, although there were needs in other places. This has enabled efficient implementation of the training by avoiding frequent travels within the country. In order to cover the needs from other places, instead, sign language classes and other awareness raising activities have been organized outside Yangon.
- SLS candidates who participated in the study tour in Japan have shared their learning with their colleague after they came back to Myanmar.
- Neither SLT nor SLS candidates have dropped out from the training. All SLT remain and continue working as trainers.

per 12

2

3-3-4. Factors which Have Influenced Production of the Outputs

One favorable factor is that neither SLT nor SLS candidates have dropped out from the training. Even though some SLT and SLS have participated in the training without salary, learning has been a motivation for them. This has contributed to efficient achievement of the Outputs 2 and 3.

As mentioned earlier, finalization of the SLS candidates for the second batch is delayed, because many organizations suffer from shortage of staff and they cannot make a decision, at short notice, on sending staff to 18-month training. It is pointed out by DSW that ministries and organizations should understand the importance of sign language support services and training of SLT.

3-4. Impact

Even though the Overall Goal has not been reached, some positive impacts have been reported. If the sign language support services starts as planned, more positive impacts can be prospected in the near future. No negative impact has been reported.

3-4-1. Prospect of the Achievement of the Overall Goal

As mentioned in 2-4, sign language support services on individual request have not started yet, which means that it is too early to expect the achievement of the Overall Goal.

The sign language support services are to start after August 2014, it is expected that more Deaf could have an easier access to health services, educational activities, and government services. Also, more Deaf would have more job opportunities.

3-4-2. Other Impacts than the Overall Goal

Some positive impacts other than the Overall Goal has been produced.

Firstly, some SLT and SLS candidates were dispatched, on request of several organizations, to meetings and other events in order to provide support for the Deaf people, as shown in the Table 8. In particular, ASEAN Para Games were broadcast with sign language by the state-run channel for the first time in the country. This made the Deaf and sign language known widely to the Myanmar public, and also drew much interest of the authorities of other ministries, according to DSW.

Secondly, empowerment of Deaf SLT has been promoted. According to SLT, by obtaining the sign language teaching knowledge and skills, some of them have overcome shame in using the sign language in front of others. Thus, they have come to express themselves with their own language.

Thirdly, successful implementation of the Project has attracted interest of the Japanese public through the broadcast of TV news, visit of the Diet members, university students, etc.

2012

2

Table 8: Sign language support provided by SLT and SLS candidates
for organizations requesting their support

Year	Date	Events	Place	SLT/ SLS candidates sent
2013	19 Nov	Support in Yangon Asia Pacific Clinic	Yangon	1
	23 Nov	Meeting of Working Committee of PWD	Inn Sein Township	2
	25 Nov	Ceremony of the wheelchair race Yangon-Nay Pyi Taw	Bahan Township	1
	30 Nov	Meeting of Working Committee of PWD	Inn Sein Township	2
	1-3 Dec	Ceremony of the International Disabled Day	Nay Pyi Taw	2
	10 Dec	Meeting between Deaf Resource Center and Handicap International	Bahan Township	2
	16-18 Dec	Discussion and lectures on ASEAN Mechanism and Charter	Bahan Township	6
2014	11-22 Jan	7 th ASEAN Para Games	Nay Pyi Taw	17
	26 Jan	Training on ASEAN Mechanism and Human Rights for PWD	Yangon	2

* PWD: Persons with disabilities

3-5. Sustainability

For continuous training of SLS and provision of sign language support services, a detailed and concrete operational plan is needed. Considering the following aspects, if the detailed plan is prepared with the initiative of DSW, the Project sustainability will be assured.

3-5-1. Policy Aspect

The National Development Plan includes programs to promote social participation of persons with disabilities, and the coming five-year plan (2015-2019) includes training of SLT. Also, the National Plan of Action for Persons with Disabilities 2013-2018 will contain actions to be taken to promote social participation of persons with disabilities including the Deaf people.

3-5-2. Institutional Aspect

As explained in 2-2-1, DSW developed the "Future Action Plan for Sign Language Support Services (2014-2017)." This plan consists of the simple outline but lacks detailed operational planning for each batch. DSW is planning to make a concrete plan for SLS training and provision of sign language support services before the Project is completed.

With regard to collaboration with other relevant ministries and institutions, such as Ministry of Education, Ministry of Health, Ministry of Labor, and Supreme Court, for provision of sign language support services, according to DSW, there will be no difficulty expected as DSW has worked in close cooperation in the social welfare sector.

There is a plan to move functions of SLS training and coordination of sign language support services to a new building where the Deaf school will be newly established. Current

Handwritten mark

Handwritten mark

office facility and training equipment will be transferred.

There are a few concerns with regard to human resources. First, currently there are some SLT who do not belong to any organization and SLS candidates whose status needs to be ensured as support service Coordinator. Regarding this issue, DSW commented that they will receive them as DSW staff. Second, more SLT will be necessary in the future, as some of the current SLT may not be able to work full-time. DSW considers that more hearing SLT will be selected from the sign language Coordinators. Also more Deaf SLT need to be trained.

3-5-3. Technical Aspect

As explained in 2-3, both SLT and SLS candidates have reached the desirable level to work as trainers and supporters. To keep the present level, systematized monitoring and feedback for SLT and SLS will be necessary. The curriculum and materials for training of SLT and SLS have been developed in the Project, and there will be no urgent necessity in revision of these.

As for the sign language support service Coordinators, they will receive on-the-job training from the Project through coordination of the practical training.

3-5-4. Financial Aspect

The coming five-year plan (2015-2019) of the National Development Plan includes training of SLS and awareness raising activities among others. According to DSW, sufficient budget will be allocated for these activities for the coming five (5) years. Besides, DSW has an idea to establish a special fund so as to cover the cost for provision of sign language support services.

For detailed budget planning, DSW will call a meeting with the Project including SLT before the Project is completed.

4. Conclusion

As described above, the Project has high relevance, effectiveness and efficiency, and more positive impacts and sustainability may be expected in the near future. Therefore, the Project shall be completed as scheduled in August 2014.

Concretely, the Project has been relevant with Myanmar's policy on social welfare of the persons with disabilities, needs of the Deaf community, as well as Japan's ODA policy. Capacity of SLT and SLS candidates has been developed through a series of activities of training and awareness raising. For these outputs and outcomes, human, material and financial resources have been utilized appropriately in terms of quantity, quality and timing. Among the impacts created, a noteworthy example is the broadcast of sign language in the national news on ASEAN Para Games. This is the first time in the country, and has drawn interest of the public as well as the authorities of other ministries. DSW is now preparing an operational plan for provision of sign language support service, and when it starts, more

perla

positive impacts will be expected on the Deaf and the Myanmar society.

5. Summary of Discussions

Based on the results of the Terminal Evaluation, the Team and DSW agreed the following matters.

5-1. Human Resources

- Two (2) SLT who don't currently belong to DSW or NGO will become permanent DSW staff after April 2014, and they will not have any other duties than SLT.
- One (1) SLT who will work part-time (probably once per week) as SLT without salary from his NGO will receive the transportation cost after April.
- Three (3) SLS candidates who are currently salaried by NGO will be appointed sign language support service coordinators will become permanent DSW staff from April, if SLS and their organizations agree.
- For the first year of provision of support services, all six (6) support service coordinators will be stationed in Yangon. For the second year, three (3) coordinators may be added, and if necessary, three (3) coordinators may be assigned also in Mandalay from nine (9) coordinators.
- The number of both Deaf and hearing SLT are insufficient for future development. With regard to hearing SLT, some will be selected from the support service coordinators.

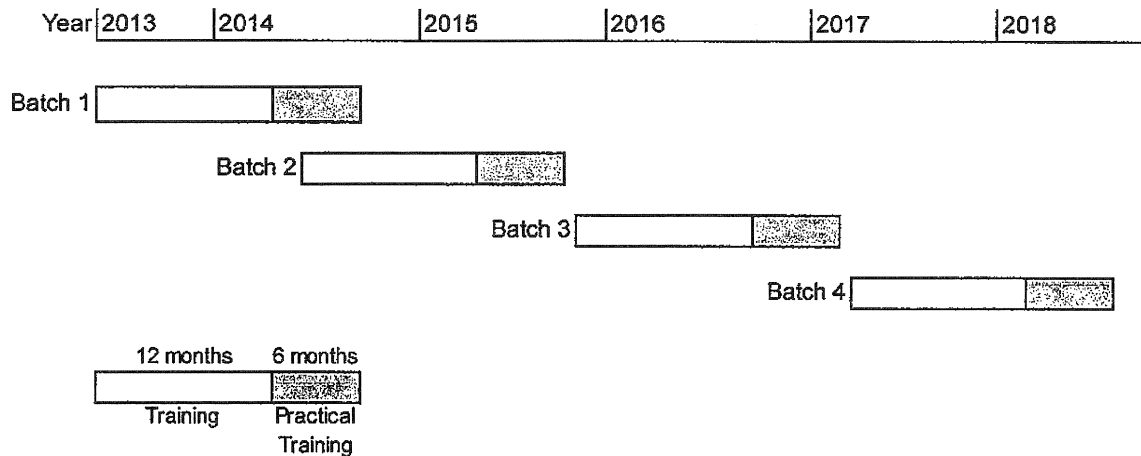
5-2. Training of SLS

- The second batch training will start after April 2014.
- SLS training will be conducted in Yangon until the fifth batch. Training may start also in Mandalay in the middle of the five-year plan.
- Training functions will be transferred after the Project finishes. The same facility for training and administrative work as the current building (4 rooms and equipment) will be arranged by the DSW.
- After training functions are transferred to the building of the new Deaf school, accommodation will be provided to SLT in the same compound.
- After one training batch is completed, the next batch will start, as shown in the Figure 1.

Handwritten mark

Handwritten mark

Figure1: Example of the Timeline of SLS Training



5-3. Provision of Sign Language Support Services

- DSW will start to cover the cost for support service provision such as transportation and allowance, when the support services start..

6. Recommendations and Lessons Learnt

Based on the results of the Terminal Evaluation and discussions above, the following recommendations were made by the Japanese Team to DSW, the Project and JICA, in order to ensure further achievement and sustainability of the Project outcomes.

6-1. Recommendations

6-1-1. Recommendations to DSW

(1) Development of the Detailed Operational Plan for Provision of Sign Language Support Services

For effective and efficient provision of sign language support service, the detailed operational plan is necessary. The plan should contain clearly defined actions, and for each action, its timeline, person in charge and estimated cost should be clarified. Related to the operational plan, DSW also needs to prepare a monitoring plan such as what information should be shared, with whom the information should be shared, how the information should be collected, etc.

DSW needs to prepare the plan before the Project is completed in cooperation with the JICA expert and SLT.

(2) Appropriate and Timely Selection of SLS Candidates and Support Service Coordinators

In order to ensure high quality of sign language support services, appropriate candidates should be selected for every training batch. And, the smooth and effective support services depend much on the work of the coordinators.

Handwritten mark

Handwritten mark

It is recommended to DSW to select appropriate candidates for SLS training. In order to receive qualified applicants from relevant ministries and organizations, DSW needs to give them sufficient information on the importance of sign language support for the Deaf. Also, a sufficient period for application should be set, so that they can have time for selection of appropriate applicants.

(3) Establishment of a Committee on SLS Training and Support Service Provision

The Joint Coordination Committee of the Project has worked as a good mechanism where DSW, JICA expert, SLT and other related agencies share how SLS training has been conducted and discuss how it should be. After the Project is completed, it is recommended to DSW to establish a similar committee consisting of DSW, SLT and sign language support service coordinators to conduct regular meetings for the management of both SLS training and provision of sign language support services. Through this committee, DSW could understand progress and issues related to SLS training and support service provision. DSW could also develop policies in social welfare of the Deaf further, by carefully listening to and discussing with SLT and support service coordinators.

6-1-2. Recommendations to the Project

(1) Cooperation for DSW in Developing a Detailed Operational Plan

It is expected that before the Project is completed, DSW would develop a detailed operational plan for future SLS training and provision of sign language support services. It is recommended to the Project, namely, JICA expert and SLT, to share their experience in training of SLT and SLS and conducting the practical training of sign language support service, so that the detailed operational plan would be feasible and effective.

(2) On-the-Job-Training of the Sign Language Support Service Coordinators

So far, the JICA expert has been mainly responsible for management of SLS training and coordination of the practical training. After the Project is completed, these responsibilities need to be handled by the support service coordinators, in close collaboration with SLT. Thus, it is necessary for the JICA expert and SLT to clarify the terms of reference for these duties and transmit knowhow to the candidates of support service coordinators. For example, the candidates could be seated in the Project office and carry out management and coordination work together with the JICA expert as on-the-job training until the Project is completed.

6-1-3. Recommendations to JICA

(1) Monitoring of SLS Training and Support Service Provision

It is recommended to JICA headquarters and Myanmar office to monitor the progress and issues of SLS training and provision of sign language support services. Obtaining from the committee mentioned above would be one means of information gathering. Through the monitoring, JICA could see whether collaboration with DSW would be necessary and

Handwritten mark

Handwritten mark

appropriate or not, and obtain useful information for the ex-post evaluation of the Project.

6-2. Lessons Learnt

6-2-1. Effective Implementation of Training courses in Japan by Designing Pre- and Post- Inputs

The Project contains a series of training courses in Japan. These courses were conducted effectively by including pre- and post-training and workshops to prepare and review the learning of training courses in Japan. Concretely, SLT first received a series of lectures as shown in Annex 6 in Yangon from the JICA long-term expert, and then they participated in the training course in Japan to deepen their knowledge and skills from Japanese experiences in teaching the sign language and supporting the Deaf. After they returned to Yangon, they tried applying what they had learnt in Japan. Inputs of short-term experts were also designed to enhance the outcome of these training courses. Such design succeeded to create synergetic effects of various inputs in the aspect of human resource development.

6-2-2. Participation of the Target Group as Agents

Deaf people who have been selected as SLT played key roles as agents in the Project. Deaf people are also the target group of the Project as well as end users of sign language support service to be developed by the Project. Active participation of Deaf SLT as agents of the Project created two positive impacts. It contributed to make outcome services and products be more user-friendly by reflecting users' perspective. Their active participation in the Project also became a visible role model of social participation of Deaf people for not only to the Deaf peers but also general communities, i.e. impacts for raising awareness on the importance of social participation of the Deaf. The process to be agents of the Project became a process of empowerment of the target group, too.

6-2-3. Project Design Foreseeing Necessary Steps for the Achievement of the Overall Goal

The Project was not designed to implement produced outcomes, i.e. sign language support services, in the period of the Project. However, the Project was designed to include some inputs and activities which would contribute to the implementation of services after the Project period by supporting designing and planning aspects of implementation. The Project design foresaw what would be necessary for the achievement of the Overall Goal and went beyond mere achievement of the Project Purpose. Support for DSW in developing a plan for the implementation of the produced outcomes would contribute to the achievement of the Overall Goal. Such foreseeing designing is effective for laying the foundation towards the achievement of the Overall Goal.

Handwritten mark

Handwritten mark

ANNEXES:

Annex 1. Evaluation Grid

Annex 2. PDM ver. 1

Annex 3. Inputs by the Myanmar Side

Annex 4. Inputs by the Japanese Side

Annex 5. Future Action Plan Sign Language Support Services (2014-2017)

Annex 6. Implementation of the Training

mark

2

Annex 1. Evaluation Grid

	Evaluation question		Necessary data/ information	Data collection method
	Evaluation questions	Sub questions		
Relevance	Has there been necessity of implementing the Project?	Has the Project been in line with the needs of the Deaf people community?	Difficulties and needs of the Deaf regarding in receiving public services	- Interview with DSW, SLT, and disabled organizations - Review of relevant documents
		Has the Project been in line with the needs of DSW?	Needs of DSW in providing sign language support services	- Interview with DSW and SLT
	Does the Project remain political priority?	Have the objectives of the Project been consistent with development policy of Myanmar?	1) National Development Plan 2) National Plan of Action for Persons with Disabilities 2013-2018	- Document review
		Have the objectives of the Project been consistent with aid policy of Japan?	ODA Databook (MOFA website)	- Document review
	Has the Project been appropriate as measures for problem-solving?	Has the Project approach been appropriate strategically?	Selection of the target group, areas, activities, etc.	- Interview with DSW, JICA expert, and JICA
		Does Japan have comparative technical superiority in the field of disability?	Japan's experience in sign language teaching	- Interview with DSW, JICA expert, and SLT - Review of relevant documents
Effectiveness	Has the Project Purpose been achieved as planned?		Achievement level of the Project Purpose	- Review of the Project reports - Interview with JICA expert
	Have the Outputs been produced as scheduled?		Achievement level of the Outputs	- Discussion within the Team - Interview with JICA expert and DSW
	Were the Outputs necessary and sufficient to achieve the Project Purpose?		Logic between the Outputs and the Project Purpose	- Review of the Project reports - Opinion of the Team
	Were the Outputs necessary to achieve the Project Purpose?	Have there been any factors which influenced the project implementation, besides the Activities?	Possible factors related to project implementation other than the Activities	- Interview with DSW, SLT, JICA expert - Review of the Project reports
Efficiency	Have the Outputs been produced as scheduled?		Achievement level of the Outputs	- Interview with DSW, SLT, JICA expert - Review of the Project reports
	Were the inputs appropriate in quality, quantity in timing?	(By Myanmar side) (By Japanese side)	Inputs record and its use	- Review of the Project reports - Opinion of the Team
	Were the Inputs and		Logic between the Inputs	- Interview with SLT and

2012

24

	Activities necessary to produce the Outputs?		and the Outputs	JICA expert - Review of the Project reports
	Are there any factors which influenced the achievement of the Outputs?	Have the trained SLT and SLS remained as trainers and supporters?	Current working situation of SLT	- Interview with DSW, SLT and JICA expert - Review of the Project reports
		Are there any other external factors which influenced activity implementation?	external factors which influenced activity implementation	- Interview with DSW, SLT and JICA expert - Review of the Project reports
Impact	Will the Overall Goal be achieved?	Will DSW continue training of SLS?	Feasible plan for SLS training	- Interview with DSW, SLT and JICA expert
		Will DSW start and continue provision of sign language support service?	Feasible plan for service provision (including collaboration with other ministries, budgeting, etc.)	- Interview with DSW, SLT and JICA expert
	Are the Project activities and outputs enough to achieve the Overall Goal?		Logic between the Inputs and the Outputs	- Review of the Project reports - Opinion of the Team
	Are there any factors which influence the achievement of the Overall Goal?	Will the moving of the training function influence training implementation?	Timeline of the moving, space and facility in the new place, and its influence	- Interview with DSW, SLT and JICA expert
		Will the trained SLT remain working as SLT?	Assurance of the status, SLT's plan, plan of training of more SLT, etc.	- Interview with DSW
		Are there any factors which may influence training of SLT and support service provision?	Possible factors related to training of SLT and support service provision	- Interview with DSW, SLT and JICA expert - Review of the Project reports
	Are there impacts other than the Overall Goal?	Has there been any unexpected impact by training of SLT and SLS?	Impact created by training of SLT and SLS	- Interview with DSW, SLT, JICA expert, disabled organization, and SLS
		Has there been any unexpected impact of the Project?	Unexpected impact	- Interview with DSW, SLT, JICA expert, disabled organization, SLS, and MOI
Sustainability	(Policy aspects) Will there be established support from government's policy/system?	Will the Government and DSW continue their policies to promote sign language support and participation of the Deaf?	Position of support for the Deaf in the policies	- Review of the Action Plan and relevant documents - Interview with DSW
	(Institutional aspects) Will there be established organizational structure required to sustain project effects?	Does DSW have its official plan to train SLT and SLS?	Plan to train SLT and SLS (feasibility of action plan, budgeting, updating of plan, etc.)	- Interview with JICA expert, SLT and DSW

2012

22

	Does DSW have its official plan to provide sign language support services?	Plan to train SLT and SLS (feasibility of action plan, budgeting, collaboration with other ministries, etc.)	- Interview with DSW and other relevant ministries
	Will DSW allocate sufficient personnel in charge of supervision of the training of SLT and SLS?	Assignment of personnel in charge of supervision of training of SLT and SLS, its TOR, number of the personnel, etc.	- Interview with DSW
	Will DSW allocate sufficient personnel in charge of supervision of provision of the sign language support services?	Assignment of personnel in charge of supervision of support service, its TOR and demarcation with Coordinator, number of the personnel, etc.	- Interview with DSW
	Is collaboration between DSW and other ministries appropriate?	Demarcation in collaboration, monitoring system, etc.	- Interview with DSW, and JCIA expert
	Can SLS concentrate on providing support services?	TOR of SLS, budget related to providing support services	- Interview with DSW
(Technical aspects) Will there be enough technical level in the implementing agency to sustain project effects?	Have SLT acquired firm knowledge and skills for training of SLS?	Teaching ability of SLT	- Interview with DSW, JCIA expert, SLT and SLS
	Can SLT revise the curriculum and materials by themselves?	Necessity of curriculum/material revision and SLT's ability	- Interview with DSW, JCIA expert, and SLT
(Financial aspect) Will the implementing agency secure the financial condition required for sustaining project effect?	Will DSW allocate sufficient budget for the training of SLS and SLT?	Budget planning for training of SLS/SLT and support services	- Interview with DSW
(Others)	Are there other factors which may influence implementation of the training and provision of support services?	Other factors which may influence implementation of the training and provision of support services	- Interview with DSW, JCIA expert, and SLT

part 2

7/11

Annex 2. PDM ver.1

(Agreed on 31 January 2013)

Narrative Summary	Objectively Verifiable Indicators	Means of Verification	Important Assumptions
<p>Overall Goal</p> <p>DSW sustains training to Sign Language Supporters and sign language supporting services for promoting social participation of the Deaf.</p>	<p>1. Number of trained Sign Language Supporters after completion of the Project</p> <p>2. Number of service users</p> <p>3. Level of satisfaction of service users</p>	<p>1. Project Report</p> <p>2. Project Report</p> <p>3. Questionnaire</p>	
<p>Project Purpose</p> <p>Capacity of Sign Language Trainers to train Sign Language Supporters is improved by DSW.</p>	<p>1. Level of teaching ability of Sign Language Trainers.(80 % of participants who complete the training reach the minimum level to work as a Sign Language Trainers)</p> <p>2. Level of Sign Language ability of Sign Language Supporters (80 % of participants who complete the course reach the minimum level to work as a Sign Language Supporters)</p>	<p>1. Sign Language teaching skill evaluation</p> <p>2. Sign Language skill evaluation</p>	Implementation system of DSW does not change
<p>Outputs</p> <p>1. System to train Sign Language Supporters and provide sign language support service is established by DSW.</p> <p>2. Training of Sign Language Trainers is implemented</p> <p>3. Training of Sign Language Supporters is implemented by Sign Language Trainers.</p> <p>4. Awareness raising activities on the Deaf and sign language are implemented.</p>	<p>1-1. More than 40 Sign Language Supporter candidates are selected by DSW.</p> <p>1-2. Plan of Sign Language Supporter training and provision of sign language support service.</p> <p>2-1. More than 8 Sign Language Trainers are trained.</p> <p>2-2. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 4 out of 5.</p> <p>2-3. The understanding level of the training participants is rated higher than 4 out of 5.</p> <p>3-1.70 % of the Sign Language Supporters candidates complete the training.</p> <p>3-2. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p> <p>3-3. The satisfaction level of the training participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p> <p>4-1. More than 12 workshops and 50 sessions of sign language class are implemented.</p> <p>4-2. More than 1000 persons participate in the awareness raising activities.</p> <p>4-3. The satisfaction level of the participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p> <p>4-4. The level of understanding on the Deaf and sign language of the participants is rated higher than 3.5 out of 5.</p>	<p>1-1. Project Report</p> <p>1-2. Record of DSW</p> <p>2-1. Project Report</p> <p>2-2. Questionnaire</p> <p>2-3. Questionnaire</p> <p>3-1. Project Report</p> <p>3-2. Questionnaire</p> <p>3-3. Questionnaire</p> <p>4-1. Project Report</p> <p>4-2. Project Report</p> <p>4-3. Questionnaire</p> <p>4-4. Questionnaire</p>	

Handwritten signature

Handwritten mark

Activity	Input		
1-1 To assess needs of sign language support. 1-2 To plan Sign Language Supporter training and sign language support service provision. 1-3 To conduct regular monitoring and evaluation. 2-1 To select Sign Language Trainers and assess their teaching level on sign language. 2-2 To develop training program for Sign Language Trainers. 2-3 To implement training for Sign Language Trainers. 3-1 To select Sign Language Supporters. 3-2 To develop training curriculum for Sign Language Supporters. 3-3 To implement training for Sign Language Supporters. 4-1 To plan awareness raising activities. 4-2 To develop program of Awareness raising activities. 4-3 To implement awareness raising activities.	Japan Side 1. Long-term expert: - Project coordination /Training Planning 2. Short-term experts (tentative): - Sign Language Teaching Method Development - Sign Language Teaching Material Development - Sign Language Interpreter Development - Awareness Raising Activities 3. Training in Japan 4. Project cots 5. Consultative Mission	Myanmar Side 1. Counterpart personnel - Deputy Director General (Project Director) - Director, Rehabilitation Section (Project Manager) - Deputy Director, Rehabilitation Section - Assistant Director, Disabled Rehabilitation Section - Assistant Director, Rehabilitation Section - Principal, Mandalay School for the Deaf - Principal, Mary Chapman School for the Deaf 2. Office space for the experts 3. Training Spaces 4. Part of the project cost: training/ workshop venues, etc.	Task Force members continue their work
			Pre-conditions

Handwritten mark

Handwritten mark

Annex 3. Inputs by the Myanmar Side

A. Counterpart Personnel

Name	Title	Responsibility
U Aung Tun Khaing	Deputy Director General, DSW	Project Director
U Saw Win	Director, Rehabilitation Section, DSW	Project Manager
Daw Yu Yu Swe	Deputy Director, DSW	
Daw Khin San Yee	Assistant Director, DSW	
U Swan Ye Ya	Assistant Director, DSW	
Daw Yi Yi Shwe	Principal, Mandalay School for the Deaf	
Daw Nyunt Nyunt Thein	Principal, Mary Chapman School for the Deaf	

B. Others

- Facilities for the Project Office and training rooms for Sign Language Trainers and Sign Language Supporters have been provided.
- Accommodation places and costs have been provided.
- Costs for electricity and water have been covered.

Handwritten signature

Handwritten mark

Annex 4. Inputs by the Japanese Side

A. Dispatch of Experts

1) Long-term Expert

Name	Title	Period
Ms. Mitsuko Ogawa	Project coordination / Training Planning	3 August 2011 to date

2) Short-term Experts

Name	Title	Period
Ms. Harumi Kimura	Sign Language Teaching Method (for Deaf SLT)	2 September to 8 September 2012
Ms. Noriko Miyazawa	Training of Sign Language Interpretation (for hearing SLT)	2 September to 8 September 2012
Ms. Harumi Kimura	Sign Language Teaching Method 2 (for Deaf SLT)	11 March to 16 March 2013
Ms. Noriko Miyazawa	Training of Sign Language Interpretation 2 (for hearing SLT)	11 March to 16 March 2013
Ms. Hitomi Akahori	Sign Language Teaching Method 3 (for Deaf SLT)	10 August to 16 August 2013
Ms. Naoko Nakajima	Training of Sign Language Interpretation 3 (for hearing SLT)	25 August to 31 August 2013
Ms. Kazuko Sakurai (Umino)	Sign Language Teaching Method 4 (for Deaf SLT)	12 October to 19 October 2013
Ms. Harumi Kimura	Sign Language Teaching Method 5 (for Deaf SLT)	9 March to 15 March 2014
Ms. Noriko Miyazawa	Training of Sign Language Interpretation 5 (for hearing SLT)	9 March to 15 March 2014

B. Local Operation Expenses

FY	Amount	Items
2011	5,051,000 JPY	Honorarium for the resource persons, domestic travel, communication cost, car hiring, etc.
2012	7,538,000 JPY	Ibid.
2013	9,184,000 JPY	Ibid. (as of January 2014)

Handwritten mark

Handwritten mark

C. Training in Japan

FY	Training Period	Course Title	Trainees
2012	19 January to 25 January 2012	Sign Language Teaching Method: Advanced Level (for DSW officers)	2
	19 January to 18 February 2012	Sign Language Teaching Method: Advanced Level (for SLT)	8
2012	24 June to 29 June 2012	Sign Language Teaching Method: Advance Level II (for DSW officers)	2
	24 June to July 2012	Sign Language Teaching Method: Advance Level II (for SLT)	8
2012	18 November to 23 November 2012	Training Method of Sign Language Supporters I (for DSW officers)	2
	18 November to 2 December 2012	Training Method of Sign Language Supporters I (for SLT)	9
2013	15 June to 21 June 2013	Training Method of Sign Language Supporters II (for DSW officers)	2
	12 June to 30 June 2013	Training Method of Sign Language Supporters II (for SLT)	9
2013	8 December to 21 December 2013	Training Method of Sign Language Supporters III (for SLS)	2
	8 December to 21 December 2013	Training Method of Sign Language Supporters III (for SLT)	9

Handwritten mark

Handwritten mark

Annex 5. Future Action Plan for Sign Language Support Service (2014-2017)

Objective	To establish SL Support Service for Deaf Community.
Activities and Steps	<ul style="list-style-type: none"> ● SL Training of 9 Trainers ● Trainers are conducting training to 24 SL Supporters (1 year) ● Practical Training (6 months) ● SLT will conduct SLS training, such as Batch 2, 3, 4, etc. ● SL Supporters will work to SL Support Service in the region and state ● Establish SL Support Services
Vision of the Sing Language Support Service	<ul style="list-style-type: none"> ● Within 10 years, Deaf people in 5 regions (Yangon, Mandalay, Bago, Ayeyarwaddy, Shan) in Myanmar will be able to use health, education, legal, and employment services with the SL Support Service. ● In 10 years, the national qualification system for SL Supporter, SL Trainer and SL Interpreter in place and functional. ● Concerted political commitment in place to promote standard Myanmar SL.
Goal in 5 Years	<ul style="list-style-type: none"> ● Human Resource Development ● SL Support Service ● Promotion of Deaf Culture and SL
Human Resource Development	<ul style="list-style-type: none"> ● On conditions that DSW ensure job security for those who do not have status/ income. ● At least 20 certified SL Trainers (4-6 hearing, 14-16 Deaf) provide training for SL Supporter in Yangon. ● At least 100 certified SL Supporters to provide the service in 5 regions. ● Central SL Center established under DSW Social Science Training School in Yangon where professional posts for SLT to be created. ● DSW create professional posts for SL Supporter. ● Discussion to start on the qualification system for SL Trainers, SL Supporters & Training of SL Interpreter.
Sign Language Support Service	<ul style="list-style-type: none"> ● SL Support Service model fully set-up in Yangon and Mandalay with functional coordination and Monitoring & Evaluation structure ● Service delivery scaled up to Bago, Ayeyarwaddy and Shan.
Dispatch of 24 SLS to promote Deaf culture and sign language	<ul style="list-style-type: none"> ● 4 SLS → 2 Deaf Schools (in Yangon and Mandalay) ● 3 SLS → MRTV ● Other 17 SLS → SL workshop, education, health, legal
Continuous Workshop on Sign Language	<ul style="list-style-type: none"> ● 3 SL Supporters → Mandalay ● 1 SL Supporter → Taunggyi ● 1 SL Supporter → Nay Pyi Taw ● 4 SL Supporters → Yangon ● 4 SL Supporters → Bago ● 4 SL Supporters → Ayeyarwaddy ● Some SLT will also participate alternately for each state and region.

* Prepared by the Team based of Annex 9 of the Minutes of the meeting of the fourth Joint Coordination Committee in October 2013.)

2012

2/

Annex 6. Implementation of the Training

A. Training of Sign Language Trainers (Sign Language Teaching Method)

	Year / Month	Topics
Natural Approach	2011 September	1) Same/Different, 2) Number, 3) Family, 4) Birth Place [Practice: 1 Sign Language Class]
	October	5) Occupation, 6) Education, 7) Self-History, 8) Year, Month, Day, 9) Daily Activities [Practice: 2 Sign Language Classes]
	November	10) Food, 11) Like/Dislike, 12) transportation, 13) Weather, 14) Travel, 15) Shopping [Practice: 2 Sign Language Classes]
	December	16) Health, 17) Sports [Practice: 1 Sign Language Class]
	2012 January	[Review of the Natural Approach]
	February	[Training in Japan 1] (See Annex 4 C.)
Communicative Approach	March	1) Plan of the House, 2) Toilets, 3) Things Left behind
	April	4) Bicycle, 5) Hospital
	May	6) Barber/Hair Salon, 7) Movie, 8) Traffic Accident, 9) Map
	June	[Review of Topics 1]]] to 9]]
	July	[Training in Japan 2] (See Annex 4.C)
	August	10) Glasses, 11) Events of the Season, 12) Classifier (CL) [Training on the Sign Language Teaching Method]
	September	13) Disaster, 14) Teeth/Dentist, 15) Gasoline, 16) Introduction of Friends, 17) How to Wake up [Training on the Sign Language Teaching Method] [Training given by the Short Experts] (See Annex 4.B)
	October	18) Going back to Hometown [Training on the Sign Language Teaching Method]
	November	[Training in Japan 3] (See Annex 4.C)
	December	19) Medicine, 20) Deaf School, 21) Newspaper, 22) Politics
2013 January	[Training on the Sign Language Teaching Method]	

Besides the above sign language teaching method, the theories on translation/interpretation, teaching method for sign language translator/interpreter, evaluation of SLS have been dealt with during the training.

yas 12

[Handwritten mark]

B. Training of Sign Language Supporters

	Year / Month	Subject	Topics
Liberal subjects	February 2013 to April 2013	Sign Language I (Natural Approach: Basic)	Myanmar Language, Linguistics, Sociology, Psychology, Introduction to rehabilitation, Introduction to Social Welfare, Physical expressions
Special subjects	March 2013 to June 2013	Sign Language II (Natural Approach: Advance)	Basic of interpreting training, Translation training I (SL to Myanmar), Translation training II (Myanmar to SL), Theory of sign language interpreting, Social welfare for the deaf
		Sign Language III (Grammar, classifier)	Ibid.
	July 2013 to January 2014	Sign Language IV (Practice)	Interpreting Training I (SL to Myanmar), Interpreting training II (Myanmar to SL), Interpreting Training III (Role play)
		Sign Language V (Presentation)	Ibid.

Since February 2014, the practical training has started. Each practical training is two weeks, and SLS candidates receive it in different places. While the candidates have no practical training, they stay at the training room and continue interpreting training and role-plays by lecture and self-study.

Handwritten mark

Handwritten mark

